



令和6年度
事業報告書

社会福祉法人 広寿会

○特別養護老人ホームひろた
○短期入所生活介護事業所ひろた



○小規模多機能型居宅介護事業所 やまの里たまたに



令和6年度
社会福祉法人広寿会 事業報告書
目次

1. 法人部門.....	3
【運営理念】	3
【基本方針】	3
〈ひろた職員心得〉	3
【令和6年度目標の評価】	4
〔1〕 法人の概要	10
〔2〕 役員等の状況	10
〔3〕 令和6年度評議員会開催状況	10
〔4〕 令和6年度理事会開催状況	11
〔5〕 職員の状況	11
2. 施設部門.....	13
【令和6年度目標の評価】	13
〔1〕 施設部門の状況	14
(1) 施設の種類	14
(2) 運営状況（利用状況）	14
〔2〕 事業内容	16
(1) 行事報告	16
〔3〕 委員会	17
(1) 施設ケア会議	17
(2) サブリーダー会	18
(3) 事故防止委員会	18
(4) 排泄委員会	20
(5) ユニット会	20
(6) 身体拘束廃止委員会	21
(7) 褥瘡予防委員会	21
(8) 感染予防対策委員会	22
(9) 医療安全管理委員会	22
(10) 苦情検討委員会	23
〔4〕 その他の会議	24
(1) 第三者委員会	24
(2) 家族の会	24
3. 在宅部門.....	25
〔1〕 指定居宅介護支援事業所ひろた	25

【令和6年度目標の評価】	25
(1) 運営状況	26
(2) 苦情受付	26
(3) 地域連絡会	26
〔2〕 やまの里たまたに	26
【令和6年度目標の評価】	26
(1) 運営状況	28
(2) 事業内容	29
(3) 事故報告	30
(4) 運営推進会議	31
(5) 苦情受付	32
(6) 在宅ケア委員会	32
(7) 業務改善委員会	32
〔3〕 砥部町デイサービスセンター（砥部町受託事業）	33
【令和6年度目標の評価】	33
(1) 運営状況	35
(2) 事業内容	36
(3) 事故報告	37
(4) 苦情受付	38
(5) 在宅ケア委員会	38
〔4〕 砥部町地域支援事業（砥部町受託事業）	39
(1) 地域住民グループ支援事業（砥部町デイサービスセンター実施）	39
(2) 家族介護教室（やまの里たまたに実施）	39
(3) いきいき見守り配食サービス	40
〔5〕 支援ハウス（砥部町受託事業）	40
(1) 運営状況	40
(2) 行事報告	40
4. 会 議 等	41
〔1〕 運営委員会	41
〔2〕 職員会	41
〔3〕 広報委員会	42
〔4〕 防災委員会	42
〔5〕 給食委員会	43
5. 研 修 等	47
〔1〕 施設内研修	47
〔2〕 2024年「24時間テレビ」福祉車両納車	47
〔3〕 愛媛県「生産性向上のモデル事業」	48

1. 法人部門

【運営理念】

「ノーマライゼーションの理念を大切に」

- 1 自立支援〈できるだけ自立した生活の支援〉
- 2 自己決定〈できるかぎり本人による選択・決定〉
- 3 権利擁護〈いつの場合も個人の権利を守る〉

【基本方針】

「一人ひとりの暮らしを支えるケア」を目指して

- 1 利用者一人ひとりを見つめ、最期まで尊厳ある生活の実現
- 2 利用者の人権、プライバシーの保護
- 3 在宅高齢者の生活支援、QOLの向上
- 4 保健・医療・福祉の連携を強め、地域の福祉ニーズに応える
- 5 研修及び自己啓発等により職員の資質向上を図る

〈ひろた職員心得〉

今日も一日

1. さわやかな挨拶を交わします

2. 明るい笑顔で接します

3. 想いやりのある言葉で接します

4. 愛と真心を持って介護します

これらを胸に

働ける幸せに感謝します

【令和6年度目標の評価】

（1）満足度の高いサービス提供と地域に根差した事業所づくり

① 利用者や家族の希望を積極的に取り入れたサービスの提供

施設にとって、面会や外出の制限は、新型コロナウイルス等の感染リスク回避に一定の効果があるが、反面、利用者や家族の満足度を大きく損なう。この認識の下、特養では、一度に4人までの人数制限は設けるも、日中の一定時間居室やリビング等の居住エリアにおける面会を6年度初めに認めた。また、4人を超える場合であっても、屋外散策等は自由に楽しんでいただいている。曜日の制限もなく、事前予約も不要なので、面会に関する家族の不自由さもかなり改善できたと感じている。家族の協力で自宅への一時外出や外泊が増えてきたことも喜ばしい。

その一方で、特養では10月、施設開設当時から施設運営への提言をしたり、共同して施設行事等に当たったりしてくれた家族の会が、6年度末での解散を決めた。高齢化や遠隔地在住等、会を構成する家族にも様々な事情があるので仕方のないところもあるが、職員不足が深刻さを増し、各種行事を縮小・廃止したり、利用者への個別対応が難しくなったりしている中、少し寂しくも感じる。

介護人材の不足等、多くの不安要素がある中、社会の変化とともに複雑多様化する利用者や家族の事情やニーズに事業所としてどう応えられるのか、法人、そして事業所の今後の大きなテーマである。

② ICTの活用等によるケアの可視化と家族や地域とのつながりの再構築

介護記録の重要性は認識しつつも、記録の本来の目的である『次のケアに活かす記録』が不十分という課題解決を図るべく、愛媛県生産性向上支援補助金を活用して、介護記録システムの機能を大きく向上させた。これにより、今までかなりの時間を要し、ときには職員個々の経験値に委ねるところもあった記録の分析、そして予測という作業がAIの力を借りて、効果的かつ効率良くできるようになった。また、キーボードでの記録入力が、音声やカメラ撮影で代替できるのもPC操作が不得手な職員や特養に5人いる外国人技能実習生にとってはメリットが大きい。もっとも、十分に使いこなすには、まだ少し時間がかかりそうである。そして、AIによる分析や予測という機能を満足いくレベルで発揮させるための必要かつ十分な材料となり得る現場の的確で正確な記録スキルを養成することが、今後の重要課題と捉えている。

この補助事業では同時に、居室や廊下等に一定数の見守りカメラも設置した。職員による見守りが届きにくい場所や時間帯の事故防止、そして事故発生時の迅速な対応に効果が期待でき、家族の安心にもつながったと思っている。

ICTが介護現場の課題解決に、そして山間過疎地での事業活動に大いに役立つことは疑いのないところなので、今後の展開として、その有用性を家族や地域との新たなつながり方に上手く活用できないか検討したい。

③ 有効な研修等による認知症への対応力向上の取り組み

介護職員の認知症介護基礎研修の義務化に伴い、6年度は外国人技能実習生を含む8人が受講を修了した。また、サブリーダーの介護職員1人が、事業所の協力によって認知症介護実践者研

修を修了できたことは、当人の自信や事業所全体の団結につながった。

コロナ禍に導入した Web 研修システムが定着し、6 年度も職員が個々のスケジュールに応じて自由に学んだ。その一方で、様々な企業が同様のサービスを提供し始め、新しい提案も届いているので、研修委員会が使い勝手や費用対効果の検証に着手した。

オンラインや電話による 24 時間医療相談サービスを導入するやまの里たまたみには、その利用が現場の安心、そして対応力向上に役立っている。介護職員は、医師や看護師とのやり取りを通じて、看護師の常勤配置がない不安を払拭しながら成長している。

④ 高齢者実態把握事業や公益的取り組みを通じた地域住民との関係づくり

広田地域の人口はここ数年 6%の比率で減少しており、隣近所で互いに支え合ってきた高齢者が集落で一人になってしまう状況が増えている。高齢者本人はもとより、離れて暮らす家族にとっても心配な状況であるが、包括との連携と砥部町から受託する高齢者実態把握事業で迅速な関わりができた。

その関わりの中で気になるのが、福祉・介護サービスを利用することに抵抗感を抱く高齢者の多さである。広田地域の高齢者の多くは、畑に通うことを日課としており、それを理由にサービス利用を拒まれることが多いが、もう一つ『他人の世話になるのは恥ずかしいこと』だとする価値観がまだまだ根強く、これがサービス利用に至らない理由となっている。

サービス利用への心的なハードルを下げ、『他人の世話になるのではなく、心身の機能を維持して住み慣れた自宅での生活を継続するための利用』という意識を持ってもらうことは難しいが、行政や民生委員とも連携して、根気強くアプローチしていくしかない。

⑤ 大規模自然災害への備えと感染症対応における医療機関との連携強化

社会福祉充実計画に挙げていた LP ガス非常用発電設備設置工事が、愛媛県高齢者福祉施設防災対策事業費補助金を活用して 3 月に完了したことで、停電への備えは大きく前進した。山間部という立地から台風や降雪による自然災害はもちろんのこと、11 月に四国の広範囲で起こった送電トラブルのようなケースもあるので非常に心強い。

非常用発電設備によって、停電時でも空調機器や在宅酸素等の医療機器の使用も可能になったが、電源の供給範囲や容量には制限があり、使用できる範囲や機器は一部に限られる。普段と全く同じように使えるわけではないので、具体的な使用ルールについては、7 年度に BCP 計画の見直し等とあわせて検討することとした。

感染症対応においては、新型コロナウイルスもインフルエンザウイルスも通年の感染が珍しくない状況となっており、8 月には特養で風邪が大流行し、11 月にはやまの里たまたみに、3 月には砥部町デイサービスセンターで新型コロナウイルス感染が拡大した。特に、砥部町デイサービスセンターは職員の半数が感染する事態となり、1 週間の事業所休止を余儀なくされた。

このような経験も踏まえ、特養では 3 月 19 日、入居者の新型コロナウイルス感染を想定し、感染確認からの一連の初動対応を訓練した。これからより実践的な訓練を定期実施し、効果的な対策を講じられるよう努めたい。

(2) 職員の資質、専門性の向上と働きやすい職場環境づくり

① 専門性の向上を目指した資格取得の奨励（喀痰吸引研修の実施）

介護福祉士資格を有する職員 5 人から喀痰吸引等の実地研修を受講したいという希望があったので、6 年度に開講した。喀痰吸引等の資格を取得すれば、原則、介護ではできない痰の吸引等の医療行為が認められ、介護福祉士にとっては大きなスキルアップになる。

また、事業所にとっても、看護職不在の夜間帯におけるケアが向上すると同時に、資格取得者の夜勤帯常時配置で加算算定も可能になるので、非常にメリットがある。

受講修了まで引き続き支援していき、職員の成長意欲を最大限応援するという法人の責務をしっかりと果していきたい。

② 福利厚生充実と人材定着への取り組み（設置型社食の導入等）

職員確保において足枷の一つであろう山間部という立地の悪影響を少しでも小さくする取り組みとして、設置型社食「オフィスでやさい」、「オフィスでごはん」を6年度導入した。周辺にコンビニがないのを不便に感じる職員の多さから試みたもので、24時間・365日を交替で勤務する職場環境、そして、おにぎりやサラダが税込100円という価格設定が職員のニーズに上手くマッチし、非常に好評である。

かかる費用の捻出は決して楽ではないが、職員の就業環境の改善には十分と言える効果があった。福利厚生は、求職者の事業所評価の大きなポイントの一つなので、費用対効果を見極めて充実、改善に努めたい。

③ 将来を担うリーダーの養成

法人が求める職員階層別の行動基準、あるいは職種別スキルを成長支援制度の中で示しており、6年度もこれをもとに職員個々の成長を促すべく、面談（成長確認）等をした。ただ、常勤職員の減により、管理や監督を担う職員も現場の一職員として交替勤務に入ることが多くなってしまい、経験年数の浅い職員の知識や技量を傍らで確認し、その都度必要な指導等を行うことは十分にできなかった。

リーダー養成の具体的な取り組みは、まだ手探りの状態と言わざるを得ない。費用の問題や場合によっては職員の業務負担増になる恐れ等もあるが、できるだけ多くの職員に様々な経験を積む機会を提供したい。そのうえで、日々の業務の中で先輩職員の知識や技術、そして考え方を後輩に伝えていける仕組みを作りたいと考える。

また、近年、職場でのハラスメントやコンプライアンスに関するトラブル、そして、世代間ギャップ等による職員教育の難しさを見聞きすることが多い中、当法人の体制を顧みると、一人の担当者に任せっきりになっていることも否めない。複数で分担したり、指導経験の浅い者には必要な研修機会を与えたりすることの必要性も感じている。

④ 成長支援制度と賃金体系の見直し

平成28年4月、それまで給与表によりほぼ一律に行ってきた定期昇給を見直し、成長度合いや貢献度に応じたポイント制による昇給制度を導入した。そして、成長支援制度の本格運用を開始した平成29年4月には、28年度に全部改正した給与規程に則って職員を再格付した。それか

ら7年、当初に掲げた「成長する職員、法人に貢献する職員、そして責任ある立場で組織を牽引する職員らの賃金を手厚くする」という計画は後退し、悪く言えば、以前のような「やってもやらなくてもあまり変わらない」傾向になりつつある。

この大きな要因は、法人の収支差額の減少、そして最低賃金や社会保険料の上昇で柔軟に使える人件費がないためである。処遇改善加算の算定をして職員の賃金増加に取り組んではいるが、実感として効果は薄いと云わざるを得ない。

賃金の問題は、職員のやる気や定着、そして経営にも大きな影響を与えることなので、理事会でしっかり議論して早め早めの対策を講じていかなければならない。

⑤ 雇用環境の整備と人材の確保（適切な労務管理とメンタルヘルスサポート）

働きやすい職場環境整備は事業所の責務として、職員会や主任・副主任で構成する運営委員会等、様々な機会でも話した。見守りカメラや設置型社食の導入は、6年度のその取り組みの主な実績である。有給休暇の取得についても、全体として一定程度は取得している。ただし、職員個々で取得率には大きな開きがある。

また、社会問題化している「ハラスメント」について、全職員を対象にアンケートを行い、その結果を踏まえて2月13日と14日の2日間、専門家を講師に招いて役職者と一般職別の研修会を実施した。

小規模法人で充当できる予算確保も厳しいが、明るく気持ちの良い職場であるよう事業所と職員が協力してできることを着実にやっていく。

⑥ 外国人技能実習生の育成支援

令和4年9月に最初の2人を迎え入れ、令和7年2月には5人目の技能実習生を迎えた。これで、当初計画していた5人がそろった。5人のうち3人は夜勤もこなして、現場の力になってくれている。最初のうち心配した利用者とのコミュニケーションについても、いつの間にか自然体で関わってくれているので、今では新しい技能実習生を迎えても全く心配していない。

職員の任意で構成する職員互助会にも加入し、歓送迎会や忘年会行事にも積極的に参加して日本人職員とも打ち解けている。

気になる点は、3年を経過した後の進路である。事業所としては、そのまま残ってくれると嬉しいが、当人たちには都会生活への憧れもあるようで、こちらとしては当人たちの判断を見守るしかない。

いずれにしても、今、技能実習生が広寿会に力を貸してくれる欠かせない存在であることは間違いなく、技能実習生にも広寿会に来て良かったと思ってもらえるよう支援したい。

（3）成長可能な活力のある法人経営

① 事業所単位での稼働目標の達成

社会福祉法人といえども事業の収支に目を向けないわけにはいかず、各事業所には数値目標を立ててもらい、その達成に向けて努力してもらった。しかしながら、その結果は厳しいものとなっている。

利用者の死亡及び入院や施設入居、台風や積雪、そして新型コロナウイルス等々、稼働にマイナス影響する要因も大小あったが、新規利用の減少や平均介護度の低下も要因の一つと分析する。職員の不足によって、居宅訪問等の広報活動に手が回らなかったことも否めない。「稼働を上げるため、何にどう取り組んだか」、「その効果はどうだったか」、そして「もっといいやり方やアイデアはないか」を改めて職員間で話し合うこととしたい。

② 報酬改定への対応（改定内容の確認と算定可能な加算の取得）

6年4月、国による介護報酬の見直しによって、当法人の全ての事業所では基本報酬単価が上がった。そして、6月には処遇改善加算が一本化され、当法人では当該加算のない居宅を除く事業所全てで最上位の加算を算定している。また、同月、特養、ショートステイ、そしてやまの里たまたまには、介護ロボットや見守り機器等のテクノロジーを導入し、生産性向上ガイドラインに基づいた業務改善を継続的に行う目的で新しく設けられた「生産性向上推進体制加算Ⅱ（10単位/月）」の算定を始め、8月には光熱水費の上昇相当分として、居住費が日額60円引き上げられた。

しかしながら、職員配置等の影響から、特養とショートステイで「夜勤職員配置加算（13単位/日）」の算定を1月以降停止したり、やまの里たまたまには「訪問体制強化加算（1000単位/月）」を算定できなかった月があったりした。

国による加算の新設や改廃を精査して、可能なものは算定するよう対応しているが、要件が厳しく、算定できないものが多いのも現実である。加算は重要な収入なので、要件を満たすものについては今後もしっかり算定していくという姿勢は維持していきたい。

③ コスト意識の徹底とムダをなくすことによる経費削減

6年度は、日常的に使用するペーパータオル等の消耗品や紙おむつ等の介護用品のほぼ全てが値上がりした。コスト上昇分の価格転嫁が直ちにできない介護保険事業所にとって、ここ数年の物価高騰が法人全体の運営に与える影響は極めて大きい。

管理部を中心に、物品の購入では常に価格比較を行いながら支出の抑制に努めているが、使用量を減らしても支払額が5年度を超える状態であり、唯一、支出削減につながったことと言えば、6年4月からの特養宿直の廃止くらいである。

物価高は、この先まだ当分続きそうな気配を見せているので、さらに、費用対効果の視点やコスト意識を持って業務に向き合うことを職員に求めたい。

④ 事業運営の合理化と生産性の向上（ICTの計画的導入、各種会議や業務の再検討）

職員の不足を補い、業務上の負担軽減を図ろうと、積極的に取り組んだ。愛媛県生産性向上支援補助金により、介護記録システムの機能拡充や見守りカメラ設置ができたことは、非常に幸運なことであった。また、ロボット掃除機の導入も、業務負担の軽減につながった。

また、特養では、長らくリビングを半分に仕切って日々のケアを行ってきたが、常勤職員数減への対応策として、フロアを一つにして全体でケアを行えるよう、間仕切り壁を撤去した。やり方を変えることには、戸惑いや抵抗を感じる職員もいたようだが、とにかく行動して、ダメだったらそこでまた考えるという気持ちで取り組んでいる。

職員の採用は直ぐには叶わず、むしろさらに減少するかもしれない。現場職員には、変化を恐れず、柔軟な頭で改革していく気持ちを持ってほしいと思う。そして、法人は、しっかり職員を支え、守っていくための対策を講じなければならない。

⑤ 情報発信力の強化（HPの刷新、SNSの定期更新等）

新しいホームページが、一先ず形になった。ただ、内容を含め、細部はこれからしっかり手を入れていかなければならない状態で、広寿会や事業所のことを知っていただける、必要な情報を見つけていただけるものに仕上げていきたいと思っている。

また、今の時代にあった方法で情報発信していくことの必要性は痛感しており、次の段階として、7年度はInstagramを軌道に乗せていきたいと考えている。

一方で、インターネットによる情報発信では、個人情報の扱い方に十分な配慮が求められる。そのため、発信開始前の下準備として、3月から順次、利用者の写真掲載等について家族に説明し、承諾をいただいている。

広寿会が苦手とする分野の最たるものなので苦勞も多いが、しっかりと広寿会の魅力発信に努めていきたい。

〔1〕 法人の概要

1. 法人名 社会福祉法人 広寿会
2. 所在地 愛媛県伊予郡砥部町総津 405 番地
3. 法人の事業
 - ① 第一種社会福祉事業
特別養護老人ホームの経営
 - ② 第二種社会福祉事業
 - (イ) 老人短期入所事業の経営
 - (ロ) 老人デイサービス事業の経営
 - (ハ) 介護保険法に基づく介護予防・日常生活支援総合事業の経営
 - (ニ) 介護保険法に基づく介護予防通所介護事業又は第 1 号通所事業の経営
 - (ホ) 生活支援ハウスの経営
 - (ヘ) 小規模多機能型居宅介護事業の経営
 - ③ 公益事業
介護保険法に基づく居宅介護支援事業、介護予防支援事業又は第 1 号介護予防支援事業

〔2〕 役員等の状況

1. 構成（令和 7 年 3 月 31 日現在）

評議員	定数	7 人
理事	定数	6 人
監事	定数	2 人

〔3〕 令和 6 年度評議員会開催状況

開催年月日 出席人数	議事	
令和 06 年 06 月 24 日 (評議員) 6 人	報告	第 1 号 令和 5 年度事業報告について
	議案	第 1 号 令和 5 年度計算書類の承認について
		第 2 号 社会福祉充実計画変更案の承認について 第 3 号 令和 6 年度第一次補正予算案の承認について
令和 07 年 03 月 24 日 (評議員) 5 人	議案	第 4 号 令和 6 年度第二次補正予算案の承認について
		第 5 号 令和 7 年度事業計画案の承認について
		第 6 号 令和 7 年度当初予算案の承認について

〔4〕令和6年度理事会開催状況

開催年月日 出席人数	議事	
令和06年06月07日 (理事) 5人 (監事) 2人	議案	第1号 令和5年度事業報告並びに決算の承認について
		第2号 理事長専決事項に係る同意について
		第3号 特別養護老人ホームひろた非常用発電機設備整備工事設計監理業務の委託契約について
		第4号 社会福祉充実計画の変更について
		第5号 令和6年度第一次補正予算案の同意について
		第6号 評議員会の招集について
令和06年10月21日 (理事) 5人 (監事) 2人	報告	第1号 理事長職務執行状況報告について
	議案	第7号 理事長専決事項に係る同意について
		第8号 特別養護老人ホームひろた非常用発電機設備整備工事の入札執行について
令和06年11月15日 (理事) 6人 (監事) 2人	議案	第9号 特別養護老人ホームひろた非常用発電機設備整備工事請負契約の締結について
令和07年03月10日 (理事) 6人 (監事) 2人	報告	第2号 理事長職務執行状況報告について
	議案	第10号 令和6年度第二次補正予算案の同意について
		第11号 令和7年度事業計画案の同意について
		第12号 令和7年度当初予算案の同意について
		第13号 評議員会の招集について

〔5〕職員の状況 (令和7年3月31日現在)

【職員数】

単位：(上段)人 / (下段)歳

常勤						非常勤			全体		
正規職員			準職員								
男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
9	14	23		13	13	2	13	15	11	40	51
42.3	38.2	39.8		41.3	41.3	56.5	67.4	66.0	44.9	48.7	47.9

【平均勤続年数】

	男	女	全体
平均勤続年数	10年3か月	8年2か月	8年7か月

【新規採用・退職】

単位：人

	30歳未満		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～59歳		60歳以上		計	
	採用	退職	採用	退職	採用	退職	採用	退職	採用	退職	採用	退職
男				1								1
女	3			1		1			1	2	4	4

【配置状況】

単位：人

	特養 短期入所	居宅	小多機 (たまたに)	砥部デイ	支援ハウス
施設長	1			(1)	
部長	1				
管理者		1	1		
生活相談員	1			1(1)	
主任介護支援専門員		(1)			
介護支援専門員	(1)				
計画作成担当者			1		
看護師	2		2	1	
准看護師	2			1	
機能訓練指導員	1(1)			(2)	
〃 (嘱託)	1		(1)	(1)	
介護福祉士	10		4(1)	2	
介護士	1		4(1)	2(1)	
〃 (技能実習生)	5				
管理栄養士	2				
事務員	1				
用務員	2				
援助員					2(1)
援助員 (派遣)					4
嘱託医 (内科)	2				
〃 (精神科)	1				
〃 (歯科)	1				
歯科衛生士	1				
実人員計	35	1	12	7	6
法人全体 (嘱託、派遣は除く)	51				

※ 嘱託医 (精神科)、嘱託医 (歯科) 及び歯科衛生士は特養のみの配置。

2. 施設部門

【令和6年度目標の評価】

【重点目標】 利用者の笑顔あふれる施設づくり

(1) リスクマネジメントの視点に立った安心・安全なサービスの提供

6年度は年間を通して体調を崩す利用者が多く、入院日数は延べ120日と、前年度を大幅に増加した。入退居者ともに12人で、そのうち9人は施設で看取りを行った。

長年過ごしている利用者は高齢化に伴い、認知症状の進行したりや体調を崩しやすかったりするので、日々のケアでは迅速な対応が求められた。特に、体調の変化に気づくタイミングが難しく、ときには重篤化しているケースもあり、職員の観察力と対応力が問われる場面が見られた。

こうした状況の中で、職員一人ひとりが緊張感を持ち、チームで情報を共有しながら支援にあたったことは評価できる。一方で、変化の予兆に早期に気づく仕組みや日常的な記録の質、状態確認の技術向上といった今後の課題も明確になった。技能実習生が増え、日中、技能実習生がメインになる日も増えてきている。着実に成長してきているものの、小さな変化の察知には一定の経験値が求められることから、フォローの体制を取る必要がある。この点においても、サブリーダー以上の職員のリスクマネジメント能力や指導力が求められるため、今後は記録の見直しやケース検討の機会を意識的に増やし、リスク感知能力を強化していくことに努めたい。

(2) 業務改善を行い、利用者一人ひとりの生活習慣や想いを尊重したケアの実施

ここ数年、入居者の約3割が入れ替わる状況が続いており、入退居の度に利用者の状態把握や対応方法の検討の繰り返しとなっている。また、職員の採用が困難な中で退職や産休・育休の取得があり、限られた職員でできる限りケアを維持していくための検討を行った。大きなイベント等は難しくなっているが、日常の中で少しでも楽しみを持っていただこうと、日光浴や散歩の声掛けを行い、生活の質を保つための取り組みを継続した。何気ない会話から利用者の想いを察知し、できる限り応えていけるよう心掛け、徐々に信頼関係を築くことができていると感じる。

今後も日々の小さな積み重ねを大切にしながら、利用者一人ひとりの「その人らしい暮らし」を支えるケアを実践していきたい。

(3) 利用者参加型の調理やレクリエーションを通じた楽しみの提供と健康推進

利用者の楽しみである食事作りは毎月実施してきた。利用者の希望も聞きながら介護職員と管理栄養士でメニューを考え、主に女性利用者に調理を担っていただいた。認知症や施設入居によって調理の機会がなくなってしまった利用者も、道具を準備すると自然と身体が動き、あまりの手際の良さに職員も驚くほどであった。できないことが増えていく中でも、できることはまだまだある。職員にそれを気づかせてくれるのも食事作りの場であると感じた。生活の場所として、今後もこのような場を絶やすことなく、計画的に行っていきたい。

地域行事も徐々に復活しているが、職員数の減により一度に参加することは難しく、利用者の状況や地域を考慮し調整しながら参加できるよう努めた。中には家族が同行して下さることもあり、利用者と特別な時間を過ごせたと感じる。事業所間の交流においても、普段は見られない表情や利用者の生活歴を聞くこともでき、アセスメントの機会にもなっている。

今後も限られた職員でいかに業務を行うかの検討は続くが、利用者が笑顔になれるより良いケアの実践に取り組んでいきたい。

(4) 職員個々のレベルアップとリーダー級職員の育成

6年度は法人内で喀痰吸引等研修が実施できることになり、1人が受講した。さらに、実地研修のみの職員4人も施設で指導看護師のサポートのもと、実地研修を行っている。この研修を修了すると、介護福祉士にも一部の医療行為が実施可能となり、大きなレベルアップにつながる。研修期間中はシフトの調整等現場の協力も必要になるため、限られた配置ではあるが互いに協力し、今後も希望者に対する研修の実施を支援していきたい。

6年度は職員の異動等で、2人の職員がサブリーダーに昇格した。ユニットの廃止等業務の大幅な見直しを行う中でも意欲的に取り組んでくれており、リーダーとともに現場をまとめようと努力してくれている。今後、現場をまとめ前に進んでいくために、リーダーとしての視点をより養っていけるよう、階層別研修にも力を入れていきたい。

職員数の減により、7年度からユニットを廃止することが決まった。ユニット会議がなくなるため、リーダーとサブリーダーを中心に日頃から一般職員の意見や想いを聞き、現場をまとめていきたい。
(文責:吉見)

〔1〕施設部門の状況

(1) 施設の種類

- ①特別養護老人ホーム（指定介護老人福祉施設） 定員 30人
- ②老人短期入所事業所（指定短期入所生活介護事業） 定員 6人

(2) 運営状況（利用状況）

【指定介護老人福祉施設】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
平均介護度	3.9	4.0	4.0	4.0	4.1	4.0	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	4.0	3.9
稼働率(%)	100.0	98.7	99.0	99.7	93.6	97.4	97.6	99.0	100.0	99.5	98.4	96.6	98.2

※ 5年度稼働率 97.9% (空床利用含)

【指定短期入所生活介護事業所】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
利用件数	10	10	12	10	11	10	10	9	11	11	11	11	10.5
稼働率(%)	69.4	74.1	88.8	84.4	62.9	66.6	51.6	53.3	61.2	80.1	92.8	74.1	71.6

※ 5年度稼働率 69.1%

※ 6年度全体（特養＋短期）稼働率 84.9% 5年度全体（特養＋短期）稼働率 83.5%

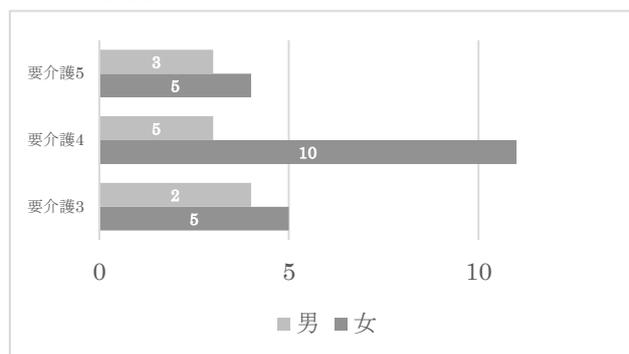
(3) 利用者の状況

【入居・退居状況】

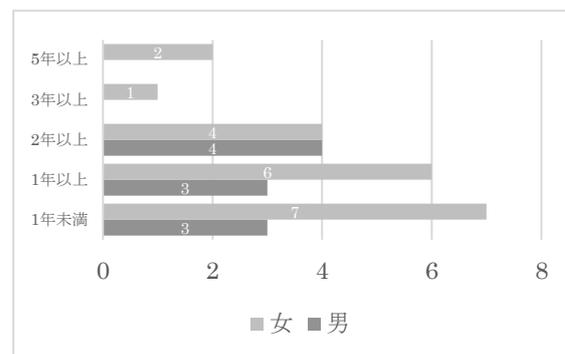
単位：人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
入居	0	0	0	1	1	4	2	1	1	0	1	1	12
退居	0	0	1	1	2	2	2	1	1	0	1	1	12

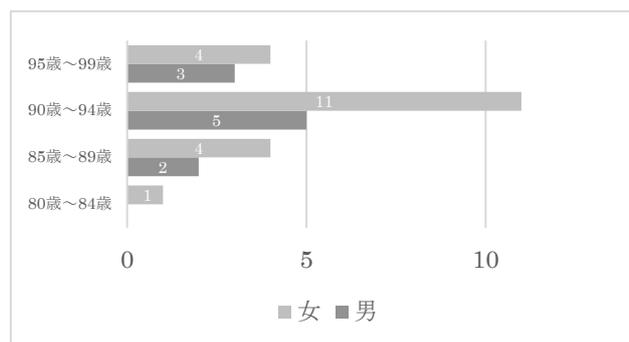
【要介護度】 令和7年3月31日現在



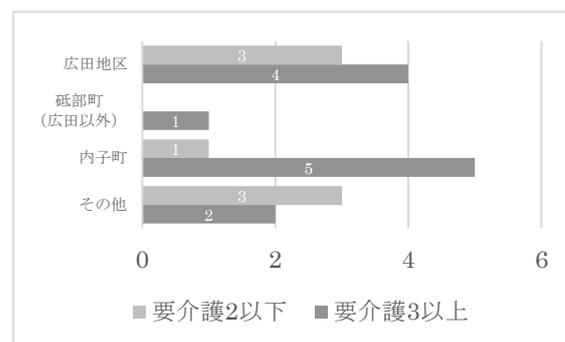
【入居期間】 令和7年3月31日現在



【年齢区分】 令和7年3月31日現在



【入居申込状況】 令和7年3月31日現在



平均年齢 男性：91.8歳・女性：91.8歳 全体：91.8歳

【入院経過状況】

件数	入院日数	入院期間	入院原因
1	11日	R06.05.15 ～ 05.27	肺炎
2	5日	06.24 ～ 06.29	敗血症性ショック（入院中に退居）
3	20日	08.05 ～ 08.25	肺炎（入院中に退居）
4	1日	08.08 ～ 08.10	急性肺炎
5	19日	08.16 ～ 09.05	気管支肺炎
6	17日	08.16 ～ 09.02	急性肺炎、DIC（入院中に退居）
7	17日	R07.01.27 ～ 02.14	左大腿骨頸部骨折
8	20日	03.11 ～	多発性脳梗塞、脳出血
9	10日	03.21 ～	心原性脳塞栓症
計	120日		

※ 5年度入院 6件 延べ入院日数 33日
 ※ 入退院日は入院日数に含めない

〔2〕事業内容

（1）行事報告

（目的）年間行事計画 ケアプランに基づいた行事等計画・実施

（実施内容）

定期開催：食事作り

外出行事：尾首の池・施設近隣（お花見）

個別対応：外出（自宅等）

施設内行事：そうめん流し、餅つき他

ボランティア：散髪ボランティア（偶数月）

《振り返りと課題》

6年度は、個別対応の外出を7件実施し、うち6件は利用者の自宅への外出を行った。どの方も住み慣れた自宅に戻ると、とても嬉しそうな表情で懐かしんでいた。ターミナル期に入られた利用者も自宅への外出が実現し、家族や近所の方に囲まれ楽しい時間を過ごすことができた。喜んでおられる姿を見ることができ、また家族からも感謝の言葉をいただき、改めて利用者の想いに寄り添ったケアの大切さを感じた。

また、昨年に引き続き地域行事への参加や小規模多機能事業所やまの里たまに、砥部町デイサービスセンターとの交流も行った。施設内で過ごす表情とは違い、様々な刺激を受ける楽しい時間となった。

年度後半は職員の減少で個別対応の外出が難しい状況になっていたが、7年度はそのような中でもどのようにしたら利用者の想いを実現できるかを考え、周囲と連携しながら利用者の笑顔がより多く見られるよう工夫していきたい。
(文責:藤岡)

《行事写真》



【自宅へ外出（仙波地区）】



【地方祭】



【食事作り】



【ミャンマーのお正月】



【ささぐり演芸 事業所交流】

〔3〕委員会

【委員会の種類と構成】

利用者の生活の質の向上、健康管理やケアの方法等について、関係職員で構成する会議及び委員会等で専門的に分析・検討し、方針決定する。

委員会等の名称	職名等 施設長	部長	主任	副主任	生活相談員	管理栄養士	介護支援専門員	ユニティリーダー	ユニティサブリーダー	ユニティ職員	その他関係職員
(1) 施設ケア会議	●	●	●	●	●	●	●	●			
(2) サブリーダー会			●	●	●				●		
(3) 事故防止委員会	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
(4) 排泄委員会			●	●	●				●		
(5) ユニット会			●	●	●	●	●	●	●	●	
(6) 身体拘束廃止委員会	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
(7) 褥瘡予防委員会	●	●	●	●	●	●	●	●			
(8) 感染予防対策委員会	●	●	●	●	●	●	●	●			
(9) 医療安全管理委員会	●	●	●	●	●	●	●	●			
(10) 苦情検討委員会	●	●	●	●	●	●	●	●			●

※ 「その他関係職員」とは、在宅部門や管理部門職員で、協議事案に直接または間接的に関係する職員

(1) 施設ケア会議

(開催日) 毎月第3水曜日

(主な協議事項) ユニット状況報告 業務連絡 職員指導

開催日	協議事項
R06.04.17	検食方法 面会方法検討
05.15	新規ショートの受け入れ 人事報告
06.19	日用品・生活品 記録確認
07.17	家族の会総会 感染症対策 人事報告
08.21	感染報告・原因分析・対応策検討 外国人技能実習生受け入れ
09.17	家族の会 物故者を偲ぶ会 ケア検討
10.15	外国人技能実習生連絡 虐待防止チェック 24時間テレビ車両採択
11.20	環境整備 調剤薬局の変更 虐待チェック集計報告 非常用発電設備工事概要
12.18	感染予防 人事 ハラスメント研修
R07.01.15	管理栄養士業務見直し センティネア導入 業務改善 外国人技能実習生受け入れ
02.19	外国人技能実習生専門級試験 嘱託精神科医契約終了 人事
03.19	BCP 訓練 オンライン精神科医療養指導サービスの概要説明 人事

《振り返りと課題》

6年度は、面会方法についての検討を行い、人数や時間帯に一部制限はあるものの居室や談話室での面会や散歩、自宅への外出等が自由に行えるようにした。現場への連絡方法等スムーズに対応できるよう協議した。8月に発生した風邪の流行についての振り返りでは、日頃の感染対策や初期対応の見直し等、再発防止のための検討を行った。

また、新たに迎え入れた2人の技能実習生の指導についても、職員によって指導内容にズレが生じないよう情報共有に努めた。先輩の技能実習生の協力も得られるようになり、指導の負担が減ってきているという効果も見られた。

12月に愛媛県介護生産性向上推進事業補助金が採択されたので、現場業務の生産性を向上させるセンチネア（見守りシステム）と記録システムのAI オプションを導入した。まだ試行錯誤の段階ではあるが、機器を活用し業務の効率化が図れるよう引き続き協議していく。

（文責：吉見）

（2）サブリーダー会

（開催日）毎月第2水曜日

（主な協議事項）事故検討 事故防止対策 ケアの方向性・確認

《振り返りと課題》

6年度も排泄ケアや事故検討を中心に実施をした。会議で難しい案件に関しては、施設ケア会議へ議題を諮問し、その回答や提案を踏まえ再検討を行っている。

（3）事故防止委員会

①件数・・・77件

ヒヤリハット・・・35件(特養27件・短期入所8件)

《危険度0》 …… 事故を未然に防ぐことができた 7件

《危険度1》 …… 事故を未然に防ぐことはできなかったが、バイタルサインを含め異常は確認されなかった 28件

事故報告書・・・42件(特養36件・短期入所6件)

《危険度2》 …… 処置や治療は行わなかったが、バイタルサイン観察は継続的に必要 34件

《危険度3》 …… 簡単な処置や治療を要した（消毒・湿布・皮膚剥離・鎮痛剤の服用） 7件

《危険度4》 …… 濃厚な処置や治療を要した（骨折・縫合・入院等） 1件

※5年度件数…85件（ヒヤリハット27件 事故報告書58件）

② 事故・ヒヤリハットの内容と件数

ヒヤリハット報告書内容別発生件数：35件	
転倒	13
内出血	9
ベッドから転落	8
1階に降りる/ベランダに出る	2
ベッド上に立つ	1
センサーマットスイッチ入れ忘れ	1
床上式リフトのフック掛け違い	1

事故報告書内容別発生件数：42件	
転倒	19
転落	19
皮膚剥離	2
爪切り介助中の出血	2

③ 原因：77 件

原因	件数	原因	件数
見守り不十分	26	行動予測不十分	6
利用者の不注意	18	職員不注意	5
確認不足	10	利用者の不調	2
環境整備不良	8	マニュアルが守れていない	2

④ 分析

6年度は、危険度4にあたる介護保険事故が1件発生した。利用者がリビングから居室に戻る途中居室入口前で転倒し、左大腿骨頸部を骨折した。臨時事故防止委員会を開催し、事故当時の状況把握及び再発防止策について検討を行った。認知症があり、度々トイレに行かれる方で、トイレの場所が分からず行き来されるため、居室トイレまでの目印テープを床に貼り、スムーズに居室へ移動しやすいよう環境整備を行っていた。しかし、当日目印に沿って数往復移動されている中で、次第に下肢に負担がかかり転倒事故につながったと考えられた。分析を踏まえて、日中移動時は職員間で協力し見守りを行うとともに、居室内にセンサーマットを設置し、コール時迅速に訪室対応を行う等、転倒リスク軽減対策に取り組んだ。

6年度の事故等の総件数は85件から77件と減少した。皮膚に関する事故は昨年と同数の11件にとどまっている。内出血が発生しやすい利用者は依然多いものの、利用者の身体状態に合わせた介護機器の活用や介助方法の見直しを適宜行い、統一したケアを継続できていることが発生抑制につながったのではないかと推測される。

反面、転倒・転落のヒヤリハット、事故の発生は59件と全体の76%を占めている。認知症状の進行に伴い移動距離の増加による転倒や、身体機能の低下による動作時のふらつき、バランスを崩し転倒するケースで、時間帯は夜間から早朝にかけて多く見られている。センサーマットの設置や見守りカメラによるモニター画面での確認を行っているが、対応に限界もある。

《振り返りと課題》

新規利用者は環境変化に伴うリロケーションダメージ、長期利用者は認知症状の進行による徘徊等により、転倒・転落のリスクが高いため、ミーティングや施設ケア会議で検討し、センサーマットや介護用手すり等の設置を行い、居室環境を整備した。コールが鳴った時は迅速な居室訪問を行い、可能な限り転倒事故のないように努めた。しかし、センサーマットや見守り機器を使用することで転倒・転落予防への若干の安心感は得られるものの、コールの頻度増加により居室訪問対応の負担が増していく状況は依然課題として残った。一方、全身状態が低下してくると皮膚に関する事故が増加する。利用者一人ひとりの状態に応じて、可能な限り対策を講じてリスク軽減に努めたい。

今後も、リスクの高い利用者の行動を継続的に分析し、介護職員の負担を軽減しながら、事故の予防に取り組んでいく。

(文責：雑賀)

(4) 排泄委員会

(目的) 排泄アセスメントを行い、排泄パターンの見直しと排泄用品の適正使用を検討する。

(開催日) 毎月第2水曜日

(主な協議事項) 排泄アセスメント・排泄用品の見直し

《振り返りと課題》

6年度は年間延べ21人の尿量測定と排泄アセスメントを実施した。個々にあったトイレの誘導時間や使用する排泄ケア用品の検討を継続的に行い適正使用と経費削減に努めた。尿量に応じて使用するパッドを調整し、パッド交換やトイレ誘導の適切な時間を設定することができた。また、自力でトイレに行かれる方や見守りにてズボンの上げ下げができる利用者には紙パンツを使用していただき、自立援助にも努めた。トイレでの排泄が行えることで吸収量の少ないパッドに変更する等も行った。しかしながら、排泄用品も段階的に値上げされ、金額的には5年度比で16%の上昇(6年度:1,164,909円 5年度:1,003,809円)となった。

今後も尿量測定や排泄アセスメントを継続し、日々の体調の変化や季節によってその時々で個々にあった快適な排泄ケアを検討しつつ、コスト削減に努めていく。(文責:越智)

(5) ユニット会

(内容) ケアの方向性の検討・確認 委員会報告を行う。

(主な協議事項) ケース検討 リハビリ方法 褥瘡予防 身体拘束廃止 感染予防
各委員会報告 栄養ケアマネジメント ヒヤリハット・事故報告検討
死期カンファレンス

《振り返りと課題》

6年度は、職員の離職や産休・育休に伴う職員減少を見込んで、ユニット廃止に向けた準備を行った。リビングの環境整備や業務の見直しから始め、その後は全体の業務を把握できるよう違うユニットに入って慣れていく等段階的に行った。看取りを行った後の死期カンファレンスでは、職員それぞれから意見を集め、悔いのないケアに努めた。

これまでユニット職員全員が出席して開催してきたミーティングは、時間調整が難しくなったことと会議のスリム化を図るため、廃止することになった。今後はユニット会の機能を施設ケア会議に集約することになるため、ケア変更や業務の見直しがスムーズにできるよう、事前に職員間で情報を収集していく。また、ダブルチェックについては、記録の分析等にかなりの時間を要していたが、記録システムのバージョンアップによってAIでの記録の集計や分析が可能となるため、精度の高い記録ができるよう取り組んでいきたい。

(文責:越智、藤岡)

(6) 身体拘束廃止委員会

(目的) 身体拘束を行わないケアを実践する。

(実施内容) ベッドの配置やベッド柵の設置状況確認(毎月)・センサーマット等の設置(随時)

(主な協議事項) 居室ベッド位置確認やセンサーマット等の機器の使用状況等(1回/3か月)

【使用状況】

単位：人

種別	年間使用人数		R7.3月末使用人数	
	特養	短期	特養	短期
見守りカメラ	5	2	2	0
センサーマット	16	2	6	1

《振り返りと課題》

6年度も、利用者個々のADLや状態変化に応じて環境整備や協議を行い、身体拘束を実施することなく対応することができた。

なかには、新規利用者が夜間時センサーマットを設置していないベッドサイド側から降りて居室内を行き来することが頻繁に見られた。転倒のリスクが高く、見守りカメラだけでは限界があるため、止むを得ず一時的にベッドの片側を壁側に寄せる対応を行った。そのような対応が身体拘束につながらないようにしていきたい。今後も委員会での状況検討や職員研修を継続して行うことで、身体拘束のないケアが続けられるようにする。(文責：雑賀)

(7) 褥瘡予防委員会

(内容) 半年に1回、総合的な観点から、予防、発生者の経過、対応の検討を行う。

開催日	ハイリスク者
R06.06.19	2人
12.18	2人

《振り返りと課題》

6年度は、褥瘡発生者はいなかった。浮腫やアルブミン値が低い利用者には、栄養補助飲料や高カロリーゼリーの提供等を行い、また日頃の皮膚の状態の観察や除圧、傷を作らないように気を付けたことが褥瘡予防につながったと考える。また、5年度の反省をもとに、全身状態を総合的に見て、ADL低下やターミナルへの移行時期を見極め、早めにマットレスの変更や除圧対応等を行い、褥瘡が発生しないよう努めたことも発生ゼロの要因ともいえる。

入退居に伴い、現在はハイリスク者が少ない傾向にあるが、今後も栄養状態や浮腫の有無等全身状態をあらゆる面から観察していき、予防に努めていきたい。

(文責：上谷)

(8) 感染予防対策委員会

(内容) 3 か月毎に現在の施設内及び周辺地域での感染状況を確認し、予防、発生の対応策等を検討していく。感染対策に関する職員研修を行う。

《振り返りと課題》

新型コロナウイルス感染症が変異を繰り返しながら静かに広がっていく中、初期対応で何とか感染を防いできたが、8月に風邪の感染が広がった。抗原検査は陰性であったものの、新型コロナウイルスと同様の対応を行ったが次々と有症者が増えた。最終的に20人の利用者が罹患し、4人が肺炎で入院となり、この感染による入院は総入院日数の5割近くを占める57日となってしまった。職員の感染は見られず、感染原因は不明だったが、感染拡大の要因として、エアコンを使用している中でのこまめな室温調節や換気が不十分だったのでは、また義歯ブラシの共有使用も感染のリスクにつながるのではないかと考え対策を行った。

感染症におけるBCP計画の策定が義務化され、6年度はこの計画に基づいて新型コロナウイルス感染者発生を想定した訓練を実施した。この訓練によって新たな課題も見えてきたため、計画の見直しを行った。施設は生活の場であることを念頭に置き、緊張感を持ちつつも穏やかな生活が送れるように対策を続けていきたい。(文責：上谷)

(9) 医療安全管理委員会

(目的) 医療事故防止の徹底と安全に対する意識啓発、対策検討を行う。

3か月に1回医療事故の発生状況を確認し、再発予防策の検討、注意喚起を行う。

医療事故 1件 (5年度 1件)

【医療的処置】

内容	人数 (5年度)
在宅酸素	7人 (6人)
胃ろうチューブ留置	1人 (3人)
尿道カテーテル留置	0人 (1人)

《振り返りと課題》

6年度はカテーテル抜去事故が1件発生した。内容としては、尿道カテーテルを留置しているショートステイ利用者が自室にて一人でトイレに行こうとされ、動いた拍子にバルンが抜けてしまった。服薬事故については、服薬準備や配薬の段階でのダブルチェックを徹底したことで6年度はゼロを達成できた。

7年度は介護福祉士の医療行為研修修了者が増えることから、介護職員による喀痰吸引等の医療行為が可能となる。ケアの幅が広がることはメリットではあるが、医療事故につながらないよう一層の注意が必要となる。今後も定期的なチェックと注意喚起を繰り返し多職種で連携を図っていきたい。(文責：上谷)

(10) 苦情検討委員会

(目的) 利用者及び家族からの苦情に対し、迅速、公正かつ適切に解決することを目的とする。

苦情受付件数：1件

【苦情内容】

体調悪化にて入院されていた利用者の家族から、状態が回復して退院したらひろたに戻れると思っていたが、すでに退居したことになっていたのが驚いた。退院になっても帰る場所がないということではないのか。どういうことか。施設と病院との間で話がしっかりできていなかったのではないか。

【苦情に至る経緯】

8/11 から風邪症状あり。内服薬を処方され施設で療養していたが、状態思わしくなく、8/16 に砥部病院受診、急性肺炎との診断で入院となる。

8/28 看護師より診療担当医師に電話で状態の確認をする。炎症反応も下がってきており、食事摂れるようになってきたとの情報。

9/ 1 看護師より診療担当医師に電話で状態の確認をする。DIC（播種性血管内凝固）を起こしている。命を落とす危険性のある重篤な状態ですと説明を受ける。

9/ 2 看護師より嘱託医に確認をする。全身状態悪く施設に戻ることは難しいとの説明あり。

9/ 2 長男より連絡あり、診療担当医師から同様の説明を受けているとのこと。一旦退居となることを伝え「そちらの良いようにしてもらって構いません」との返答。

9/ 8 病院で死亡されたとの連絡あり。自宅に帰られているとのことで弔問に伺う。

9/17 退居の手続きのため長男来所。「9/2 には状態があまり良くなかったが、その後良くなって主治医から退院の話も出ていた。籍はあるものと思っていたのに退居となっていた。これでは退院しても帰る場所がないということではないのか。医者と話がきちんとできていないのではないか。」との苦情あり。

【検討内容】

入院中診療を担当した医師と、特養嘱託医との見解に相違があった。嘱託医から施設側に「状態悪化しており施設に戻るのは厳しい」との説明があり、それを受けて施設から家族に電話し、入院の長期化を理由とする施設退居を家族に伝え、意向を伺った。家族からは「そちらの良いようにしてもらって構いません」と返答をいただいていたが、その後利用者が一時的に回復し、診療担当医から家族へ退院の話もあったことで、家族は施設に戻れる認識でいた。嘱託医と診療担当医との間で情報共有がされていなかったこと、また診療担当医及び家族から施設に状態回復に伴う退院の連絡がなかったことで、施設側としては退居されるとの認識でいた。

【検討結果】

入院時の病状説明にはできる限り同席して、家族と情報を共有する。

退居かどうかの判断は、電話ではなく直接家族と面談して説明し、了承を得る。

(文責：雑賀)

〔４〕その他の会議

（１）第三者委員会

日 時：令和6年7月18日（木）10:00～11:05 / 特養ひろた研修室

出席委員：2人

協議議題：令和5年度事業報告 各事業所事故報告 身体拘束 苦情受付 感染報告等

《意見等》

- 利用者優先意識が大きいことに伴う家族からの無理な要望がある場合、対応の基準を設け、個人判断でなく上司に相談する等、組織的な対応を明確にすることが大切。
- ユニット会では職員同士の意見交換が行われており、介護の質向上につながっていて素晴らしい。
- 人材不足と多忙な業務の中において、職員の悩みに配慮し、働きやすい環境整備やメンタルヘルスの支援を進めてほしい。
- 新機器の導入や口頭で済む連絡は簡略化する等、業務のスリム化を図ってほしい。
- 介護職は感情労働でありミスも起こりやすい。職員同士が支え合える関係づくりが重要。
- 職員の笑顔は利用者の笑顔につながるため、職場内の良好な雰囲気作りに努めてほしい。

（文責：雑賀）

（２）家族の会

総 会：令和6年10月26日（土）

- 内 容：
- ・家族の会のこれまでの歩みと今後について
 - ・イベント食の提供について
 - ・カスタマーハラスメントについて
 - ・マイナンバーカードについて

《協議/連絡事項》

- 家族の会が立ち上がった経緯やコロナ禍までの活動の歴史を振り返り、今後の方向性について協議した。コロナ禍前のような活動を行うのは困難との結論に至り、7年3月末での解散を決定した。
- 食材の価格高騰等により、提供が難しくなっていることを説明し、6年11月からの価格改定を承諾していただく。
- ハラスメントについて説明し、事業所として職員を保護し、健全な職場環境を保持する点から、ハラスメント発生の際は適正に対応していく。一方、職員に対しては、利用者の尊厳を守り対応するよう、必要な研修等を実施しており、もし何か気になること等があれば、遠慮なく施設に連絡してほしい旨を説明する。
- 6年12月で健康保険証は新規発行中止されマイナ保険証に移行される。今すぐのマイナ保険証への移行は求めないが、今後自治体の動向を確認しながら対応していく予定。

（文責：雑賀）

3. 在 宅 部 門

〔1〕指定居宅介護支援事業所ひろた

【令和6年度目標の評価】

【重点目標】できるだけ住み慣れた家、地域で暮らし続けられる支援

（1）災害発生時の対応方法や利用者・家族・関係機関との連絡体制の構築

6年度は大雨による避難指示が出た際に、独居高齢者や老々世帯を中心に訪問や電話を掛け避難の呼び掛け等を行った。何かあったら不安とのことで避難を希望される方は、離れて暮らす家族に連絡をした上で、避難所まで送迎を行い避難所担当者に情報提供をした。また、「以前避難指示が出たが特にどうもなかった」と避難されない人もいた。地区によっても考え方が様々であるが、包括支援センターが地区のサロンにおいて災害時の講話を行う等の意識づけもあり、災害時には避難をする認識が高まりつつあるように感じる。

今後も砥部町役場とも協力をして災害時の連携がとれるように努めていきたい。

（2）地域高齢者の生活支援（高齢者実態把握事業の受託）の強化

高齢者実態把握事業については、自宅での生活に不安を抱えている方中心に聞き取りをして、その都度提案や助言を行った。その中で、「介護保険サービスを利用したらええような」と利用希望はあるものの、いざ話を進めていくと「まだ自分でできることはできているのでかまわない」とサービス利用に慎重になる方が複数人おられた。

支援していく中で、近隣の知人が自宅を離れることにより、互いに支え合っていた生活環境が変わり、一人の生活に不安を感じはじめサービス利用の希望が出た。実態把握事業を通して3年間定期的に関わりをもってきたことで、速やかにサービス利用につながることができた。また、病状の悪化により独居生活が困難となった方については、子ども宅での生活をするための支援も行った。

普段から関わりを続け、地域の高齢者の状態が悪化することなくサービスの提供につなげることができ、自宅での生活が続けられるような提案や支援に努めていきたい。

（3）地域包括支援センターや地域住民との協力による多角的かつ細やかな対応

旧広田地区は人口の減少、超高齢化が進んでいる。独居世帯も増えており、離れて暮らす家族も十分な関わりが難しく、居宅としても家族と十分な情報共有ができていないケースもある。特に介護認定を受けていない方は、どこまで踏み込んで情報共有すべきか悩むこともある。高齢者の多くは、地域や近隣の住民同士で協力して生活をしているが、いつまでその生活が続けられるか、また急な体調不良等の際どこに頼ったらいいか不安を感じている様子も垣間見える。普段から地域住民と関わりをもつことで、ちょっとした心配事等の聞き取りができ、それにより、包括支援センターにつなげ、補助等を受けるための支援や、法人内外のサービスが必要であれば状況に合わせてつなげる等、住み慣れた地域で生活ができるような支援を行った。

今後も、超高齢化が進む広田地区でできるだけ住み慣れた自宅や地域での生活が続けられるよう、包括支援センターや民生委員、地域住民等と協力してきめ細やかな対応に努めていきたい。

（文責：廣藤）

(1) 運営状況

【利用状況】

単位：人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
利用 人数	22 (18)	23 (20)	25 (20)	25 (19)	25 (20)	24 (18)	23 (15)	24 (15)	24 (15)	26 (15)	27 (14)	26 (13)	24.5 (16.8)

※ 5年度月平均利用人数 23.5人(18.9人)

() 要支援者

【高齢者実態把握事業】

単位：人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
訪問 人数	3	2	0	3	4	0	3	1	3	1	2	1	23

※ 実態把握…独居高齢者で生活に不安がある方を対象に訪問し継続して訪問の必要な方

【介護度別利用実人数】 令和7年3月31日現在 平均要介護度：1.6 (5年度：1.6) ()は5年度比 単位：人

	要支援			要介護					合計
	事業対象者	1	2	1	2	3	4	5	
男性	1	2	0	4	4	1	1	0	13(±0)
女性	1	5	4	9	5	1	1	0	26(+1)

(2) 苦情受付

受付件数：0件

(3) 地域連絡会

(参加者) 砥部町保健師 砥部町国保診療所(医師、看護師)

砥部町地域包括支援センター職員 砥部社協訪問介護職員 特養ひろた生活相談員

やまの里たまたに介護支援専門員 砥部町デイサービスセンター生活相談員

居宅介護支援専門員

(開催場所) ひろた交流センター研修室

(開催日時) 毎月 第4火曜日 13:30～

(協議事項) サービス担当者会議 ケース検討 各機関連絡事項 その他

〔2〕 やまの里たまたに

【令和6年度目標の評価】

【重点目標】 地域と深くつながりを持ち、安心した在宅生活が続けられる支援

(1) 利用者目標値の達成 登録人数 介護：14人 予防：4人

6年度は登録13人でスタートし、新たに4人が利用を開始したが、長期入院や施設入居により5人が利用を終了し、3月の実人数は12人となった。終了者のうち2人は開設時からの利用者であったが、特養ひろたの入居待機者上位にあがっており、小規模多機能での支援の限界点を考えるうえで大きな転機となった。

在宅生活の継続に向け、それぞれに合わせた支援方法の検討やサービスの調整、緊急時の対

応方法について家族と相談しながら支援した。認知症の進行や病状の悪化に伴い、家族の介護負担や精神的不安も増していき、最終的には家族の決断で利用終了となり特養ひろたへ入居となった。職員の中には「もう少し在宅生活が継続できたのではないか」という意見もあり、調整の難しさを感じた。在宅生活の継続は誰かの犠牲の上では成り立たないことから、利用者、家族、職員が納得のいく形に近づけるよう『三方良し』の支援を目指していきたい。引き続き利用者と家族それぞれのニーズにできるだけ寄り添い、両者の思いをつなぐ支援のあり方を追求していく。

（２）在宅生活を継続するため、一人ひとりが意欲的に取り組める個別リハビリ・生活リハビリを実施

利用者の状態や家族の状況に合わせた柔軟な支援を心がけ、作業療法士と相談しながら、今できることに焦点を当てた機能訓練を実施した。職員間で訓練内容を共有し、過介護を防ぎながら利用者の残存機能を活かすことを意識した。また、個別の身体機能訓練だけでなく、食事作りや園芸活動等の生活リハビリにも力を入れることで、日常生活の中に役割が持て、その人らしさを引き出せるように取り組んでいった。日常的に個別リハビリメニューを中心に組み、時間が限られる場面では全体で行う体操等を取り入れ、日中の活動量の確保に努めた。

一方で、機能訓練の成果が家族に伝えきれておらず、在宅生活の中で十分に活かされていないという課題が浮かび上がった。利用者が一番の願いである「自宅での生活を続ける」ためには家族の理解と協力が不可欠で、そのためには機能訓練の成果が伝わるような「見える化」が必要と考え、それに向けての体制づくりの検討を始めた。

また、業務改善委員会において支援の方向性やサービスの調整を検討する中で「本人の思いより家族の意見を優先していないか」といった意見があがった。在宅生活を継続していく上で家族の認知症への理解等介護力向上の支援も必要不可欠であるということを再認識し、家族支援を目的とした介護教室を開催したが、仕事等の都合により利用者の家族の参加は難しかった。7年度は、利用者と家族のニーズをすり合わせた形での支援体制強化を目指していきたい。

（３）地域行事への参加・たまたにカフェの定期開催・防災訓練等を通して地域との交流を図り、つながりを深める。

地域とのつながりをより深めていけるよう、運営推進会議や「たまたにカフェ」を通して事業所が地域の一部として機能できるように努めた。

運営推進会議に一般職員も交替で参加するようにし、参加者の意見を聴くことで、地域との関わり方、自分たちが地域を支える社会資源の一部であるという役割を認識する良い機会となり、今後のサービス向上につながる一歩になったと考える。

たまたにカフェでは、地域サロングループ「奏（かなで）」との協力で一緒にリース作りを開催したり、愛媛県在宅介護研修センターの出前講座制度を活用し、介護教室を開催したりした。出前講座では、認知症についての勉強会やVR機器を使った認知症体験等を通じて、地域の方々の理解も少しずつ深めることができた。高齢者が住み慣れた地域で少しでも長く生活することのできる環境づくりの一歩が踏み出せたと感じる。

地域行事にも積極的に参加した。6年度は初めてはたる祭りの準備・片付けの協力依頼がある等、開設して4年が経ち、事業所の存在が徐々に浸透していることを実感してきている。清掃活動への参加等、地域行事にも積極的に関わることができ、地域住民と協力し地域の活性化ができたのではないかと感じる。また、参加する地域を広げたことで、地域と関わる頻度も増加し、一人でも多くの方に活動を知ってもらう機会となった。事業所が地域社会の一員として活動することにより、地域にとって頼れる事業所と認知してもらえるよう取り組むことができた。

しかし、災害時となると高齢者が利用する事業所の不安は大きい。災害への意識は常に持っており、8月の大雨の際は特養ひろたへの自主避難を行う等、予測できるものについては早めの対応を心掛けている。だが、予測不可能な災害については力を貸していただく可能性は高い。そのためにも、普段から顔の見える関係性を作っておくこと、何かあったときに協力できることが地域コミュニティにおいては重要となる。引き続き日頃の関わりを大切に積み上げて、信頼関係を築いていきたい。
(文責：門田)

(1) 運営状況

定員 18 人 (1日最大利用人数 通い 9人 泊り 6人)

【登録人数推移】 平均年齢 88.9 歳 平均介護度 2.2 単位：人

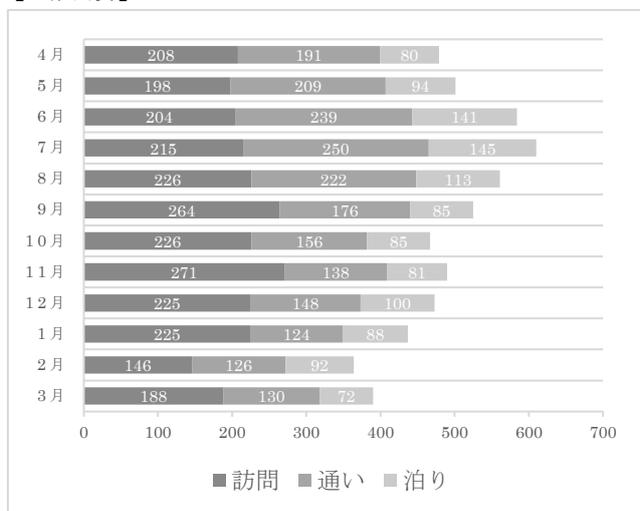
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
要介護者	11	12	11	11	11	11	10	9	10	10	10	12
要支援者	2	2	2	2	2	2	3	3	2	2	2	0
合計利用人数	13	14	13	13	13	13	13	12	12	12	12	12

【介護度別利用実人数】 令和7年3月31日現在 単位：人

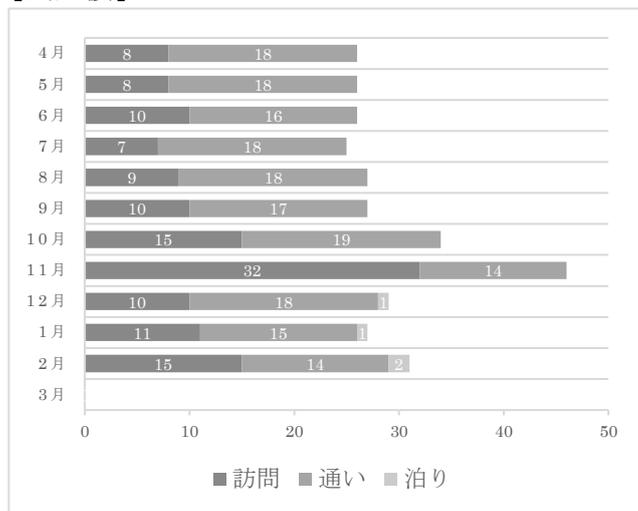
	要支援1	要支援2	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	合計
利用実人数	0	0	4	4	2	2	0	12

【利用延人数】

【要介護】



【要支援】



(2) 事業内容

(目的) 年間行事計画に基づいた行事等計画・実施

(実施内容)

外出 食事・おやつ作り 地域行事等

《振り返りと課題》

6年度は地域のイベントに積極的に参加し、地域の方との関わりを持つことができた。これまでも地域の方とのつながりはあったが、地域の方に気軽に事業所に来ていただき交流する機会が少なかった。利用者とイベントに参加するだけでなく、職員も地域清掃や地方祭、ほたる祭りの準備等に参加し、異動で新しく配属となった職員も地域の方と顔見知りになり、地域行事やイベントに参加した際にも声を掛け合う関係となり関係を深めることができた。このような関わりの中で、事業所での活動や取り組みについて少しずつ知っていただけるよう意識した。地域とのつながりは切っても切れない関係のため、双方が協力して支え合えるように関係をより深め、何かあったときに支え合える関係にしたい。

たまたにカフェの開催や砥部町地域包括支援センター主催しているカレーの会の会場提供を通して、地域の方に多く足を運んでいただく機会も増えた。12月のたまたにカフェでは玉谷地域で活動されているサロングループ奏にも協力をいただき、リース作りを行った。それぞれが好きな花や飾りを組み合わせて、オリジナルのリースが完成した。その後はお茶をしながら楽しいひとときを過ごされた。3月は家族向けの介護教室をテーマに在宅介護支援センターに講師を依頼し、出前講座を開催した。

また、感染状況を見ながら積極的に外出を企画した。近場のドライブだけでなく、利用者の希望を受けて、お寿司を食べて、椿神社を参拝し、松山劇場でお芝居を観劇した。普段は自宅と事業所の往復がメインになるが、出かけるとなると、意識が高まり、服装や身だしなみにも気を配るといった面も見られた。秋にも様々な外出を企画していたが、事業所内で新型コロナウイルスが発生し、実施することができなかった。

7年度も地域活動への参加と事業所のイベントへの参加案内を継続し、地域の活動拠点の一つとして浸透させていき、築いた関係をより深めていきたい。また利用者に楽しんでいただけるよう、利用者に希望を聴きながらの外出や、旬の物を用いた食事作りやイベントを通して季節を感じていただけるよう企画を考えていきたい。地域行事への参加だけでなく、事業所でもカフェや研修会等を定期的開催し地域の方や家族に参加していただけるようにしていきたい。
(文責：梅原)

《行事写真》

○外出



【外出 (お寿司通り)】

○食事作り



【巻き寿司】



【そうめん流し】



【たまたにカフェ（リース作り）】



【地方祭（たまたに）】



【カレーの会（地域間交流事業）】

（3）事故報告

①件数

ヒヤリハット・・・2件

《危険度0》 … 事故を未然に防ぐことができた 1件

《危険度1》 … 事故を未然に防ぐことはできなかったが、バイタルサインを含め異常は確認されなかった 1件

事故報告書・・・5件

《危険度2》 … 処置や治療は行わなかったが、バイタルサイン観察は継続的に必要 4件

《危険度4》 … 濃厚な処置や治療を要した（骨折・縫合・入院等） 1件

②内容

ヒヤリハット報告書内容別発生件数	
立位時のふらつき	1
床に座り込む	1

事故報告書内容別発生件数	
床に座り込む	4
転倒	1

③原因

内容	件数
職員の確認不足・ケアミス	7

《分析》

6年度は事故件数がヒヤリハット件数を上回る形となり、事故のほとんどが夜間帯に集中している。夜間にトイレに行こうとされ、立ち上がりの際にふらついてバランスを崩したり、ベッドからポータブルトイレに移る際、足が滑り床に座り込まれたりするケースであった。原因としてはベッドの高さ調整が十分にできておらず、床にしっかり足底がついていなかったこともあるが、靴の踵を踏んで立ち上がるケースもあった。機能訓練によって身体機能が改善してくると、利用者も自力で動かれることが増え、リスクが高まることが多い。特に眠剤を服用される方は、日中と比べて転倒のリスクも高くなるため、その都度ナースコールを押していただくように声掛けを行っている。

事故検討においては、自宅を想定した環境整備や利用者の残存機能を上手く生かせるよう個別リハビリを取り入れながら、利用者の気持ちに配慮し再発防止策を協議した。ナースコール

を押さずに独りで動こうとされるケースも多いことから、夜間は物音を頼りに訪室し支援している。今後は見守りカメラも活用し、居室環境の見直しも行っていきたい。

さらに、介護保険事故が1件発生した。送迎時、自宅から車両までの移動中に転倒し、額から出血し救急搬送となった。幸い骨折等はなかったものの、額を縫合し定期受診が必要であったことから、泊りサービスを追加し事業所で経過観察を行った。事故分析を行い全職員が送迎時の支援方法を統一して、安全に実施できるように協議を重ねた。分析の課程で、以前に比べ、円背の進行や身体の捻じれ、重心が後ろになっている等の変化に気づいている職員とそうでない職員がおり、また、職員により立ち位置や介助量の違い等、支援方法にも多少の違いがあり、情報共有や支援の統一化が不十分であることに気づいた。天候不良時における送迎の対策が不十分だったことも事故につながったのではないかと考えられる。

今回の事故を受けて、今後は利用者の状態変化について細かく記録に残し、情報共有を徹底することとした。残存機能の維持は在宅生活を継続するうえで重要なことだが、利用者の状態変化に合わせてケアの見直しを行い、その時々環境や状況にあった安全の配慮に努める。

(文責：梅原)

(4) 運営推進会議

(参加者) 施設長 部長 居宅管理者 やまの里たまたに職員 地域住民 他法人の管理者
砥部町職員 砥部町地域包括支援センター職員

(開催日) 2か月に1回

(主な協議事項) 運営状況報告 活動状況報告 事故報告 意見交換 サービス評価

開催日	協議事項	出席者
R06.06.04	地域行事参加の報告 地域の伝統行事について検討	11人
07.31	介護保険事故報告書の提出について協議 地域の高齢者の見守り体制	13人
09.30	地域の気になる高齢者について検討	11人
11.27	施設内研修「事故事例検討会」の報告 要介護認定更新の更新方法変更	11人
R07.01.27	介護保険事故の報告・事故後の経過報告	12人
03.31	登録定員変更の報告 夜間の避難方法について協議 男性利用者の過ごし方	9人

《振り返りと課題》

6年度は一般職員も会議へ参加することができ、地域にはたくさんの方の見守る目があるということ共有することができ、職員一人ひとりが地域との向き合い方を考える機会となった。出席者の中から利用者の男女比率について質疑があり、男性利用者が興味を持ち利用できる内容の見直しも必要であると提案が出た。利用者のプライベート空間を意識する等の場所を使い分けることの重要性についての意見もあり、サービス提供の考え方について新たな気づきを得ることができた。

サービス評価の結果、防災・災害対策において多くの課題があることがわかった。事業所の防災計画の周知や訓練への参加協力依頼ができておらず、いざというときの協力体制は不十分

であることを痛感した。当事業所は自然災害の影響を受けやすい場所に立地していることもあり、災害時は行政マニュアルを通して行動することも重要だが、それだけでは対応が難しいこともある。災害の規模によって対応も異なるため、職員自らが考えて行動し、対応できるようにするため、法人内の連絡・協力体制はもちろん、日頃から地域と連携するための体制を考え、整備していきたい。

7年度も引き続き、家族や地域住民との関わりを深めるとともに、民生委員や地域住民との情報共有を強化することで、高齢者が地域で安心して安全に生活できる取り組みを行っていききたい。運営推進会議の場を活用し、地域から頼られるよう事業所の機能強化を図りたい。

(文責：門田)

(5) 苦情受付

受付件数：0件

(6) 在宅ケア委員会

(参加者) 施設長 部長 居宅管理者 管理栄養士 やまの里たまたに職員

(主な協議事項) 各部署より連絡・報告 ケース検討 実績報告 事故検討 身体拘束、虐待防止の取り組み 感染予防対策、研修報告

開催日	協議事項
R06.04.22	災害時の体制、マニュアル見直し 事故検討 新体制と業務分担 加算内容変更
05.29	家族からの要望対応検討 居室の環境整備 事故検討
06.26	虐待防止 家族からの要望対応検討 利用者間の関係性 事故検討
07.31	脱水・熱中症予防方法検討 送迎車使用、送迎時の注意 感染予防への注意喚起 食中毒の注意喚起 新規利用者情報提供
08.28	訪問サービスの内容確認 災害時の避難、対応方法 防災マニュアル確認 生活シート作成方法
09.30	新規利用者の情報提供 記録の管理方法 家族との関わり (アドバイスや不安の傾聴)
10.29	新規利用者の対応 運転管理 送迎時の注意喚起 地方祭参加 情報公表調査の報告
11.26	体調不良者の対応方法 受け入れ体制 感染症対策
12.27	利用者からの要望対応検討 積雪時の対応方法検討 事故検討 研修報告
R07.01.28	見守りカメラ導入 職員人事 運営管理 運転管理、事故発生時の対応 研修報告
02.25	事故検討 職員人事 新規利用者の情報提供 Web 研修変更 研修報告
03.29	事故検討 新体制 職員人事・配置 事業計画説明

(7) 業務改善委員会

(参加者) やまの里たまたに職員

(主な協議事項) サービス内容 環境整備 記録システムの検討

開催日	協議項目
R06. 04. 09	加算関係説明 リビング模様替え検討
05. 07	防災研修 夜勤業務 環境の見直し 記録の入力方法 衣類の管理方法
06. 13	差し入れの管理 物品チェック方法 熱中症対策 体調管理 パート職員の業務分担
07. 11	地域行事实施の検討 外出行事の実施方法 訪問時の対応方法
08. 08	入浴介助時の対応方法 利用者個人の物品の購入と管理方法 福利厚生
09. 09	居室の環境委整備 たまたにカフェ開催 新規利用者の対応方法
10. 16	外出行事实施方法 避難訓練と非常時参集訓練実施の説明 営業活動
11. 15	認知症実践者研修の報告 停電時の対応方法 新型コロナウイルス感染拡大予防と対策
12. 16	事業計画（年間行事） 虐待の芽チェックリスト実施 記録忘れ
R07. 01. 16	入浴介助の見直し 洗濯方法の見直し 家族アンケート サービス評価（事業所評価）
02. 05	事故検討 再発防止策検討 見守りカメラ設置の検討 たまたにカフェ開催
03. 06	サービス評価（外部評価・総括評価）の報告 登録人数変更

《振り返りと課題》

サービスの適正な提供と業務の効率化を図ることを目的として開催している。

6年度は利用者個々の状態変化に応じて個別リハビリに取り組み身体機能の維持と環境整備を中心に検討を行った。家族の状態によって希望するサービス量は変わってくる。しかし、提供の上限は決まっていることから、利用者でサービスを分け合うことが必要で、希望に対してどこまで支援できるか協議を重ね、職員によってサービスに差ができないよう支援内容の統一化を図り、限られた人材と時間の中で利用者本人と家族が安心できるサービスが継続できるように努めた。

7年度も、利用者の状態変化に注意して事業所、家族間で情報共有を行い支援していく。また家族の負担軽減も必要であることから、利用者、家族のニーズを整理し、双方の抱える不安や悩みを軽減し、在宅生活が継続できるよう努めていきたい。（文責：梅原）

〔3〕砥部町デイサービスセンター（砥部町受託事業）

【令和6年度目標の評価】

【重点目標】楽しみながら身体機能の維持・改善を図るサービス提供

（1）利用者目標値の達成 介護：延べ人数 200人/月 予防：延べ 90人/月

6年度は、予防の目標値を下げたが、全体の稼働率が53.0%と5年度より3.6ポイント下回った。3月に、利用者、職員が、次々と新型コロナウイルスに感染し、事業所を5日間休止にしたことも稼働率低下の要因となった。

6年度の新規利用者10人中7人が砥部町在住で、うち6人の方が定期利用につながった。内子町在住の新規利用者は3人で、これまで利用された方からの評判を聞き利用開始につながった。内子町の利用者の割合は毎年増加しており、6年度は延べ利用者の46%を占めるまでになっている。稼働率を上げるためには新規利用者の獲得が不可欠であることから、2か月に1回は内子町の居宅訪問を行い、砥部町デイサービスセンターでの取り組みをアピールした。「楽しく身体を動かすことを通して、身体機能の維持・向上を目指し、笑顔が絶えない事業所」との

評価をいただき、新規の相談もいただけるようになっている。

7年度は、居宅訪問回数を増やせるよう時間の確保に努めていきたい。

(2) 記録システムを活用した利用者の状態変化の把握、異常の早期発見

砥部町デイサービスセンターの利用者の約60%は独居で、レベルの差はあるものの認知症の方も多いため、体調管理も大きな役割となっている。利用者の正常バイタル値を把握し、体調変化があった場合はバイタル数値や状態変化の経過記録を入力し職員間での情報共有を行った。状態に合わせて再検査する等の経過観察を行い、改善がない場合は、家族や介護支援専門員に連絡し早めの受診を勧めた。また、受診時は経過記録のデータを提供し、医療との連携にも努めた。その結果、施設入居での利用終了はあったものの、長期入院等大きく体調を崩す方はいなかった。

7年度も、利用者ができる限り在宅での生活が継続できるよう、普段からの状態観察と記録による情報共有を継続し、異常の早期発見に努めていく。

(3) 個々の機能訓練評価に応じたレクリエーションやリハビリメニューの導入と実践による身体機能の維持・向上

6年度は、利用者の下肢筋力維持向上を目的として新しく階段歩行訓練器のリハビリ機器を導入した。作業療法士や機能訓練指導員からの指示のもと、身体状態に応じた個別リハビリメニューを実施した。ほとんどの利用者が、職員の声掛けにより積極的に笑顔で取り組み、身体機能の維持向上に有効であったと感じている。一例として、脳出血後遺症の利用者が、週4回の利用で7種類の個別リハビリメニューに取り組み、介護保険更新で要介護1から要支援2に改善したケースがある。この利用者は、次の目標を自宅での入浴とし、作業療法士と自宅訪問を行い新たなリハビリメニューを組み、現在も意欲的に取り組まれている。

その他の利用者は介護保険更新の際に介護度が上がることなく利用継続している人が多い。7年度も継続をして自宅で生活が続けられるようリハビリを実施していきたい。

(4) 笑顔でいきいきと過ごせる活動提供と環境整備

中庭を整地し、花壇や菜園を拡大した。利用者に教えていただきながら、植え付けから収穫を一緒に行った。自宅では畑仕事をやめている方もおり、利用の度に成長具合を見るのを楽しみにされていた。一緒に作業ができる方、指導監督をしていただく方と様々だが、収穫した野菜での調理も含め、利用者のいきいきした表情を多く見ることができ、デイサービスを利用していただく楽しみの一つとして効果を発揮したと感じる。

また、今年も季節に合わせての壁面アートを多く作成した。入口からよく見える場所に飾り、来館者からも好評であった。7年度は、砥部町デイサービスの活動内容の発表の場として、ひろた交流センターのロビー展に掲示させていただき、少しでも多くの地域住民の目に触れ、また見た人の心を和ませることができるようにと考えている。

さらに、職員が漢字のパズル等も複数作成し、利用者が飽きずに脳トレに取り組めるように工夫した。利用者それぞれが興味のあるものを提供し、砥部町デイサービスが楽しい場所であること、励みになる場所であることを目標に、利用者が笑顔でいきいきと過ごせるような活動の提供に努めたい。

(文責：宇都宮)

(1) 運営状況

定員 20 人 稼働率・・・53.0% (介護+総合事業)

【通所介護】

単位：人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用実人数	16	17	18	17	18	16	17	18	18	17	17	17	17.1/月
利用延人数	149	173	166	196	149	145	172	173	180	164	160	128	1,955

※ 5年度延利用人数 1,989人 平均年齢 85.8歳 平均要介護度 1.5

【総合事業】

平均年齢 85.4歳

単位：人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用実人数	10	12	11	11	12	12	11	10	11	11	11	11	11.0/月
利用延人数	64	78	60	64	74	70	73	58	66	56	63	45	771

※ 5年度延利用人数 927人 平均年齢 87.7歳

【介護度別利用実人数】 令和7年3月31日現在

単位：人

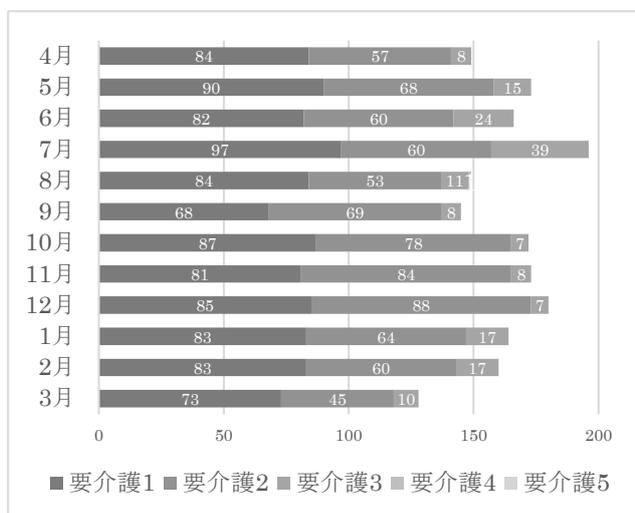
	事業対象者	要支援1	要支援2	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	計
利用実人数	3	3	5	9	6	2	0	0	28

【保険者別利用延人数】

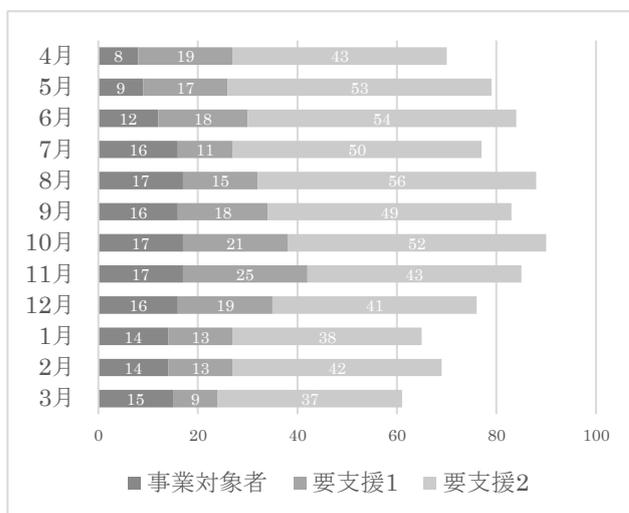
単位：人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	月平均人数
砥部町	100	131	118	126	128	121	135	117	131	126	131	103	1,467	122.2
内子町	113	120	108	134	95	94	110	114	115	94	92	70	1,259	104.9
合計	213	251	226	260	223	215	245	231	246	220	223	173	2,726	227.1
稼働率 (%)	48.4	54.5	56.5	56.5	50.6	51.1	53.2	55.0	58.5	55.0	55.7	41.1	53.0	

【要介護】



【要支援】



(2) 事業内容

(目的) 年間行事計画、ケアプランに基づいた行事等計画・実施

(実施内容)

定期開催

食事作り・おやつ作り 2回程度/月

誕生日会 毎月

季節行事

釜揚げうどん、もちつき、カレー作り、ちらし寿司作り、夏祭り、あんパン作り、手打ちうどん、鍋パーティー、敬老会、山菜おこわ作り、やきそば作り、クリスマス会、たこやき作り、よも蒸しパン作り、お茶揉み、お花見、節分、おはぎ作り、シソジュース作り

《振り返りと課題》

利用者からの希望を聞きながら、季節を感じてもらえる行事の企画を行った。屋外での行事では、桜や紅葉、紫陽花を散歩がてら見て周り、「春は色々な花が咲いて綺麗な」「こんなに綺麗なところ、初めて来た」と喜んでいて、季節の移り変わりを肌で感じ、屋外ならではの刺激を味わい、散策しながらしっかりと身体を動かすことができた。また、中庭を活用した菜園や花壇の活用では、利用者が積極的に花や野菜の世話をを行った。利用者同士が「どう植える?」「こっちに植えようや」と普段関わりが少ない方とも自然とコミュニケーションをとることができていた。作業を通して立ち座り動作や手指の機能訓練等の動作を行うことで、脳への刺激につながり活動量が増加したり笑顔も増えていたりしたと感じる。

7年度も意欲的にデイを利用していただけるよう、できる限り利用者の希望に沿ったイベントを企画し、目的を持った利用につなげ、身体機能の維持、向上につなげたい。 (文責:白石)



【花壇の草引き】



【ヨモギ蒸しパン作り】



【お茶揉みの様子】



【紅葉狩り(砥部町断層公園)】



【団扇作り】



【桜の花見(総津地区長曾池)】

(3) 事故報告

①件数

ヒヤリハット・・・7件

《危険度0》	… 事故を未然に防ぐことができた	2件
《危険度1》	… 事故を未然に防ぐことはできなかったが、バイタルサインを含め異常は確認されなかった	5件

事故報告書・・・2件

《危険度2》	… 処置や治療は行わなかったが、バイタルサイン観察は継続的に必要	1件
《危険度4》	… 濃厚な処置や治療を要した（骨折・縫合・入院等）	1件

②内容

ヒヤリハット報告書内容別発生件数	
転倒	2
連絡帳に事実との相違記録あり	1
所在不明	1
他の利用者に連絡帳を渡す	1
他の利用者に利用料請求書を渡す	1
移動販売で購入した食品の渡し忘れ	1

事故報告書内容別発生件数	
風船バレー競技中、後方に倒れる	1
床で倒れている	1

③原因

内容	件数	内容	件数
利用者の体調不良	1	見守り不十分	2
行動予測不十分	1	ヒューマンエラー	4
利用者のルール不順守	1		

④件数の推移

2年度	3年度	4年度	5年度	6年度
16件	19件	15件	11件	9件

《分析》

6年度は、休養室でベッド臥床中の利用者が床で仰臥位になっているのを発見し、受診の結果鎖骨を骨折する介護保険事故が発生した。眩暈の症状があるため、暗い部屋で静かに休んでいただこうと、休養室のベッドに誘導し臥床を促がしていた。同室で休まっていた利用者からの知らせで訪室し、事故を発見した。本人に状況を問うも、自宅とデイサービスと混同したような発言が見られ、混乱もあるが、転倒時の記憶は曖昧であった。事故検討の結果、休養室は見守りが難しいため、これまで3台設置していたベッドを1台に減らし、転倒リスクの低い利用者限定とした。

また、6年度はヒューマンエラーが4件で、5年度の1件から増加した。内容は、連絡帳に事実との相違記録、連絡帳と利用料請求書の渡し間違い、移動販売で購入した食品の渡し忘れであった。職員単独で対応せず、それぞれルールを作り、ダブルチェックをするように統一した。

その他、一時的に所在不明になったケースが1件見られた。幸い大事には至らなかったが、利用者の対応でホール内の見守りが難しい場合もあるため、意識的に声を掛け合い再発防止に取り組んでいる。

今後は記録システムを活用して、利用者の身体状態の把握と状態変化の情報共有を図るとともに、行動予測や危険察知能力を養い、事故防止につなげたい。 (文責：宇都宮)

(4) 苦情受付

苦情受付件数：0件

(5) 在宅ケア委員会

(参加者) 施設長 部長 管理栄養士 砥部町デイサービス職員 居宅介護支援専門員

(主な協議事項) ケース・業務検討 各部署・委員会より連絡 新型コロナウイルス感染予防

開催日	協議事項
R06. 04. 26	新規利用者情報提供
05. 27	送迎業務の見直し
06. 26	記録入力業務の見直し
07. 23	利用者の対応方法の検討
08. 20	利用者状態把握・ケア確認
09. 23	新規利用者情報提供
10. 14	指導監査の事前打ち合わせ
11. 25	指導監査結果報告、指摘事項改善及び業務見直し
12. 30	地域住民グループ支援事業開催方法検討
R07. 01. 22	体調不良者の対応方法
02. 17	感染予防対策の見直し
03. 31	新型コロナウイルス感染回避のため中止

〔４〕 砥部町地域支援事業（砥部町受託事業）

（１） 地域住民グループ支援事業（砥部町デイサービスセンター実施）

（目的） 地域や世代間の交流を図ることにより、高齢者の生活意欲の向上を目指す。

《評価》

２回のいきいき健康教室は、在宅リハビリで活躍中の柔道整復師と作業療法士を招いて開催した。在宅生活継続のコツは、要介護状態にならないために、自宅に閉じこもらず、散歩等日頃から積極的に身体を動かしていくことで、身心ともに元気で過ごすことができる。フレイル・サルコペニア・ロコモティブシンドローム（高齢者の健康状態を指す概念）と下肢筋力強化の必要性を学び、自宅で手軽にできる体操を教わった。参加者から「肩こりが辛いので改善するにはどうしたらいいか」等の質問が出た。また、「膝が痛くて歩くのも難儀で、歳とったらええことないな」と参加者が互いに近況を伝え合い世間話も弾んだ。



【いきいき健康教室】
令和6年9月9日（月）
参加者：39人

【いきいき健康教室～転倒予防～】
令和7年1月20日（月）
参加者：39人

1人でも多くの地域住民に参加していただけるように、早めに講師との打ち合わせを行い、作成したチラシを車に積み込み、デイサービスの送迎時に会った地域住民に配布した。また、高齢者の自宅を訪問し、案内チラシを手渡して呼び掛けることで「わざわざ来てくれてありがとう」と喜んでいただき、多くに参加してもらえたことは嬉しい成果であった。（文責：宇都宮）

（２） 家族介護教室（やまの里たまたに実施）

（目的） 地域の方や利用者家族に認知症の理解を深めてもらい、高齢者が住みやすい地域づくりを目指す。

《評価》

認知症への理解を深めていただくために、在宅介護支援センターに講師を依頼し、家族向けの介護教室をテーマに出前講座を開催した。認知症の症状の特徴やメカニズム・認知症予防の講話を実施した後に、VR機器を用いて認知症の疑似体験を行った。

「自分自身家族の介護をしていたことがあったので、もう少し早い段階でこのような研修を聴きたかった」「地域の高齢者で少し様子がおかしいと感じるときもあり、今回の研修に参加して見守ることの大切さや関連機関へ報告する必要があるということがわかった。とても良い機会になった」といった声があった。

やまの里たまたにの利用者家族にも参加していただけるよう前もって準備したものの、仕事の都合等で利用者家族の参加は難しく、利用者と地域の方の参加となった。認知症の方は大きな不安を抱えて生活を送っている。その不安に対して、どのように声を掛け、寄り添っていくのか、考える機会となった。（文責：梅原）



【家族介護教室】
令和7年3月11日（火）
参加者：12人

(3) いきいき見守り配食サービス

(目的)65 歳以上の独居高齢者等で調理が困難な希望者に、バランスのとれた食事を提供する
とともに定期的な安否確認を行う。

○利用状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計/平均
利用者数	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	11/0.9
延利用回数	9	9	8	9	9	8	10	1	0	4	4	6	77/6.4

《評価》

11月に配食を利用されていた方が入院によって利用終了となり、12月は利用者がゼロとなつてしまつたが、1月以降新たに希望する方がおられ新規開始となつた。実態把握等の訪問時に食事の内容や量を聞くと、配食サービス利用の必要性を感じる方はいるが、量が多いので残したつらもつたないや、好きな物が食べたいという気持ちが強く、利用開始まで至らない現状がある。高齢者は、低栄養から体調不良になり、状態が悪化していくケースも多く、一旦そうなると元の状態に戻すのはかなりの時間を要するため、今後も状況をみながら提案を行い栄養面での支援も行っていきたい。
(文責:廣藤)

[5] 支援ハウス (砥部町受託事業)

(1) 運営状況

定員 10 人 (月末時点での人数)

単位:人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
入居人数	8	8	8	7	7	8	8	8	8	8	8	8

※ 入居人数は月末入居人数

(2) 行事報告

砥部町デイサービスセンターや特養ひろたの催し物に随時参加

4. 会 議 等

〔1〕 運営委員会

事業運営、各事業所の課題検討、実績報告等話し合いを行う。

(参加者) 施設長 部長 所長 主任 副主任

(開催日) 第1水曜日 14:00～

(主な協議事項) 各部署からの報告・連絡 アクションプランの実施状況の報告・評価

開催日	協議事項等
R06.04.10	事業報告、安全運転、非常用発電機の補助金採択、特養の宿直廃止に伴う対応方法の周知、人事等
05.08	面会方法の変更、安全運転、虐待防止の取組、加算の取得（生産性向上）と業務効率化の取組
06.12	厨房委託業者責任者の交代、喀痰吸引研修の開始、非常用発電機、正職試験の周知
07.10	行事企画、安全運転、熱中症対策、地域行事、非常用発電機工事の進捗
08.14	感染報告・対策、検食簿記入方法の変更、消防設備点検及び研修、ICT補助金の申請、生産性向上研修等
09.03	特養ひろた感染報告、技能実習生の増員、自然災害時の対応、業務改善等
10.09	物故者を偲ぶ会の再開、ICT・介護ロボット、上半期事業所別の収入報告、虐待防止及びハラスメントのアンケートの実施、福利厚生（インフルエンザワクチンの接種方法）
11.13	調整会議の周知、虐待防止自己チェックシートの集計結果報告・事業所単位での検討依頼 非常用発電機入札終了
12.10	非常用発電設備、活動費の使用、年末年始の面会方法、加算関係、ハラスメント、人事等
R7.01.08	愛媛県生産性向上補助金の採択、正職試験の告知、安全運転、業務改善、事業計画の作成スケジュール確認、施設内研修の委託先検討
02.12	技能実習生の増員、グループケア廃止に伴う業務改善（特養ひろた）、非常用発電機完成、ハラスメント研修スケジュール
03.12	技能実習生、安全運転、求人専用HPの開設、施設内研修の変更、BCP、人事等

〔2〕 職員会

全体運営に関する職員間の情報共有を行う。

(参加者) 全職員

(開催日) 3か月に1回 第1週目 17:30～

(主な協議事項) 行事予定の連絡 各部署からの連絡事項

開催日	参加人数
R06.04.01	20
07.01	19
10.01	22
R07.01.06	23

〔3〕広報委員会

広報紙「広寿」の編集発行を中心に、法人及び事業所の情報発信に努めていく。

(参加者) 各部署で選定された職員

《振り返りと課題》

6年度は、第49号(令和6年8月)、第50号(令和7年1月)を発行し、施設利用者や家族、地域住民、そして近隣施設等関係機関へ配付した。

5年度より検討を続けていたホームページを新しく作成することができた。今後はインスタグラム等を活用していくことで、離れて暮らす家族等に対して発信できるように強化していきたいと考えている。また、求人や事業所の活動を掲載することにより、ひろたで働いてみたいと思ってもらえるような内容にしていきたい。(文責：廣藤)



【広寿第49号】

【広寿第50号】



【社会福祉法人広寿会 ホームページ】

〔4〕防災委員会

事業継続計画（BCP計画）の策定を推進し、災害への備えを強化する。

(参加者) 防火管理者 各事業所関係職員（副主任級以上）

① 防災訓練等の実施状況

年月日	訓練内容
R06.07.17	防災訓練 炊き出し訓練（砥部町デイサービスセンター） ・プロパンガス等の燃料が無い状況を想定した食事の提供訓練 薪でお湯を沸かして、昼食（釜揚げうどん）を提供
09.03	防災（BCP）訓練（法人全体） ・副主任以上を対象に夜間の地震発生を想定した机上訓練 自宅から各事業所までの参集やその他初動対応について意見交換
09.09	防災訓練（特養ひろた） ・消防署等立ち合いの下、補助散水栓と斜降式救助袋の取り扱い方法を学習
09.27	防災訓練（特養ひろた／砥部町高齢者生活福祉センター） ・消防署立会いの下、火災を想定した通報訓練、避難訓練、初期消火訓練 特養ひろたでは、レスキューシートによる移送訓練をあわせて実施
10.16	防災訓練（やまの里たまたに） ・消防署立会いの下、火災を想定した通報訓練、避難訓練、初期消火訓練
12.02	緊急連絡網伝達訓練（特養ひろた） ・中予地区老人福祉施設協議会主催の伝達訓練に参加
R07.03.19	防災訓練（やまの里たまたに） ・消防署立会いの下、火災を想定した通報訓練、避難訓練、初期消火訓練
03.19	防災（BCP）訓練（特養ひろた） ・感染症による隔離対応中の地震発生を想定。備蓄食料の提供等を確認
03.27	防災訓練（特養ひろた） ・消防署立会いの下、火災を想定した通報訓練、避難訓練、初期消火訓練 特養ひろたは夜間想定で、レスキューシートによる移送訓練をあわせて実施

《振り返りと課題》

各事業所で火災発生時の避難や機器操作の訓練をした。異動や交替勤務で職員の顔ぶれが一定でなかったり、事業所ごとに消防設備が異なっていたりするので、定期的な訓練が大切になってくる。

BCP 計画に基づく地震を想定した机上訓練では、被害想定を大きくすると難しくなるので、手始めとして、車での移動ができ、通信環境もある程度の時間で復旧したことを想定して行った。意見交換の内容を基に BCP 計画をより実効性のあるものに作り上げていきたい。また、訓練内容も工夫し、釜揚げうどんの炊き出し訓練や感染症発生時における備蓄食料提供訓練も行った。

法人及び事業所は山間部に位置しており、大雨や大雪等による主要道路の封鎖や通行止めも珍しくない。利用者が住む各地区への道はなおさらである。また、土砂崩れがひとたび起これば、停電や断水も当然予想される。

実際、これまでも何度かそのような事態に見舞われたが、幸い、大事には至らなかった。しかし、次も同じように大丈夫とは限らない。経験したことのない大災害が発生したとき、自分自身を守り、利用者を守り、そして地域を守るために、いま何をしておくべきか。行政や地域と連携しながら、地域唯一の社会福祉法人としてこの難問に向き合い、備えていくことが急務である。



【LP ガス非常用発電設備】

6 年度は愛媛県高齢者福祉施設防災対策事

業費補助金を活用して LP ガス非常用発電設備を整備した。非常に心強い設備ができたが、これで安全が確保されたわけではない。これを災害対策推進の出発点として、さらに意識を高めていきたい。

(文責:福岡)

〔5〕給食委員会

「食＝命」をテーマに、より良い食の提供を施設職員、厨房委託業者職員とともに取り組む。

(参加者) 委託業者 施設長 部長 施設部主任 砥部町デイサービスセンター生活相談員
やまの里たまたに副主任 管理栄養士

(開催) 毎月 1 回

(主な協議事項) 利用者の食事摂取状況や料理の味付け、献立内容、食事形態、異物混入等

《振り返りと課題》

6 年度は厨房現場責任者の急な交代があった。引継ぎがない状態での交代であったため、これまで実施してきた厨房業務の経緯を新しい現場責任者に伝え、情報を共有し、すり合わせを行う作業が必要となった。また、厨房委託業者でも人員の不足が常態化しており、食事の再加熱を朝食だけでなく昼食や夕食時にも実施したり、デイサービスの食事の盛り付けや食器洗浄を特養ひろたの厨房で行ったりする等の業務改善も行われた。

給食委員会では日々のメニューの改善点を伝え、施設厨房で対応できることと委託業者の集



【斜降式救助袋訓練】



【炊き出し訓練】

中調理施設へ伝えることをふるいにかけてながら、検討を繰り返している。

7年度は厨房職員と協力をして、食事メインのイベント開催を目標としている。

(文責：松本)

イベント食

【施設・在宅部門】

月日	行事	献立内容
R6.04.01	お花見弁当	巻き寿司・鯖の桜蒸し・エビフライ・焼き椎茸の土佐和え・ ほうれん草のお浸し・錦玉子・三色豆煮・海藻サラダ・桜もち
05.16	祝い膳	筍ご飯・筍の煮物・天ぷら・筍豆腐・木の芽和え・茶碗蒸し・ 若竹汁・よもぎ蒸しパン
06.25	祝い膳	茶そば・炊き込みご飯・かき揚げ・じゃが芋の田楽・ あじさいゼリー
07.24	土用の丑の日	うな井・チンゲン菜とコーンのソテー・すまし汁・ バナナフルーチェ
08.29	たらいそうめん	そうめん・おにぎり・鶏の唐揚げ・玉子焼き・枝豆・ぶどう
09.16	大分郷土料理	黄飯・黄飯かやく・とり天・茄子の田楽・だんご汁・やせうま
10.23	祝い膳	巻き寿司・信田巻・切り干し大根のごまネーズ和え・ 柿の白和え・きのこ汁・さつま芋プリン
11.20	祝い膳	肉うどん・茶碗蒸し・いなり寿司・野菜の天ぷら・ ひじきとほうれん草のごまマヨ和え・キウイのコンポート・ 紅まどんな
12.20	クリスマス	バターライス・煮込みハンバーグ チーズソース・ さつま芋とグラノーラのサラダ・コーンスープ・チーズケーキ
R7.01.01	お節料理	赤飯・刺身(マグロ・鯛)・筑前煮・茶碗蒸し・なます・黒豆・ かまぼこ・赤だし・栗きんとん
02.03	節分	巻き寿司・おどん・ほうれん草の白和え・甘酒・みたらし団子
03.03	ひな祭り	海鮮ちらし・ブロッコリーとじゃが芋のミモザサラダ・ 茶碗蒸し・菜の花のすまし汁・3種のベリームース

《振り返りと課題》

月に一度のイベント食では、施設の管理栄養士も協力し、施設厨房で一から調理を行った。行事に合わせた食事や旬の食材を使用し、季節に合わせた祝い膳や郷土料理等、バラエティに富んだ食事を提供することができた。でき上がったお膳を写真に撮り、タブレットで利用者に見ていただきながら、イベント食のお知らせも行った。事前に写真を見ていただくことで、食べる前のわくわく感を楽しめる時間を作ることができたのではないかと思う。

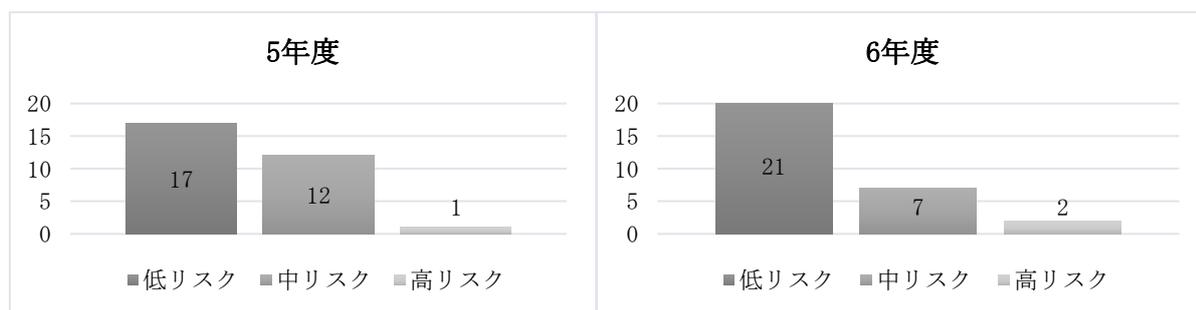


【おせち料理】

イベント食の提供においては、食材費の高騰もあり、限られた予算でいかに利用者に喜んでいただけるかが大きな課題であった。土用の丑の日は利用者も毎年楽しみにされているが、委託業者で準備していただくには予算を大幅に超過してしまうことから、施設で鰻を購入し厨房で再加熱調理を行い提供した。鰻を手配する手間はあったものの、利用者に変えていただけたので、7年度も実施できればと思う。

またユニットでの食事作りは管理栄養士またはユニット職員の担当で、毎月実施することができた。7年度は管理栄養士1人体制となるため、業務改善の一つとして、食事作りは隔月に実施する予定になっている。頻度は少なくなるが、生活の中での楽しみの時間を少しでも増やせるように、継続して実施できるよう努めたい。
(文責:松本)

①栄養ケアマネジメント評価



《振り返りと課題》

6年度も退居者が12人と入れ替わりが多かった。栄養状態が改善したケースでは、肉料理を残されることが多い利用者について、魚料理や玉子料理等に変更することで食事摂取量及び、たんぱく質摂取量が増加し、中リスクから低リスクに改善できた。2人の高リスク者については一時的な体調不良により食事形態を食べやすいソフト食に変更し、高カロリーゼリーを追加で提供し栄養補給を行った。現在は体調も回復し栄養面も改善傾向にある。また、ターミナル期に入った利用者については、栄養管理よりも嗜好を重視し、少しでも好きな物を食べていただきたいという想いで、不定期ではあるがうどんを提供する等の個別対応も行った。



【ソフト食】

さらに、食事量の低下している利用者に対しては、家族に依頼して果物等好みの物を差し入れていただき、それを職員が食べやすい形状にして提供する等、協力をいただくことも多い。管理栄養士も栄養面について家族と直接関わり、後悔のないケアができるよう努めている。

ミールラウンド（食事の観察）だけでなく、介護・看護と協力して管理栄養士も食事介助や口腔ケアを行っている。食事介助を行うことで利用者の嗜好も把握でき、食事量が減少した際には家族に相談をして、移動スーパーで好みの物を購入する等、少しでも食事量が増えて栄養改善ができるように対応している。また、口腔内の状況も把握でき、変化があれば歯科医師や歯科衛生士に相談する等、いち早く変化に気づき対応ができていると感じる。

今後も食事に対する意欲や食事時の姿勢、義歯の状態、残渣、嘔せ、摂取量等、食事状況の観察を行い、一人ひとりにあった食事方法を検討、実施し、多職種で協力して栄養状態の改善を目指していく。
(文責:松本)

②経口維持評価

5年度	6年度
3人	4人

《振り返りと課題》

6年度は5年度から継続して取り組みを行っていた利用者に1人追加され合計4人の利用者を対象に口腔機能改善や誤嚥防止のための口腔リハビリを実施した。

誤嚥防止を目的とした利用者には呼気力を上げるための腕の上げ下ろし運動や発声練習を実践している。また、口腔機能維持・向上を目的とした利用者には、手袋やモアブラシを使用し舌や頬のマッサージを行っている。指示内容はケアプランに組み込み、多職種連携で取り組めるようにしている。また、実施時間を食前に限らず、食事以外の時間や口腔ケアの時間にすることで、より取り組みやすくなっている。



【呼気力を上げる運動】

利用者の誤嚥や口腔機能低下を予防するために、継続してケアに取り組み、安全に食事摂取していただけるように努めたい。

(文責:松本)

5. 研修等

〔1〕施設内研修

(参加者) 各事業所の代表者

(開催日) 毎月第1水曜日

(目的) 年間研修計画に沿った研修を立案し職員のスキルアップに努める。

開催月	研修名
R06. 04	倫理及び法令遵守 接遇・個人情報 ハラスメント
05	感染予防 (食中毒)
06	事故防止 身体拘束、虐待防止
07	ターミナルケア
08	認知症ケア
09	褥瘡ケア
10	感染予防 (インフルエンザ・ノロウイルス・食中毒) 摂食ケア
11	事故防止・リスクマネジメント (事例検討)
R07. 01	排泄ケア
02	ターミナルケア ハラスメント (外部講師)
03	身体拘束・虐待防止

《振り返りと課題》

6年度も Web 配信での研修を継続して実施した。2月には外部講師を招き、役職者・一般職に分けてハラスメント研修を実施し、理解を深めるとともに今後の意識づけを図った。

Trust Boarding のシステムを活用した社外コーチングについては、一部の職員には高い効果が見られた一方で、業務時間内でのコーチングが難しいことがあり、全体としての運用上の課題が見られ、費用対効果の観点から今後の継続は見送る方針とした。 (文責：吉見)

〔2〕2024年「24時間テレビ」福祉車両納車

開設時に購入したリフト車両について、経年劣化により6年度での廃車を決定していた。これまでも様々な団体が実施する福祉車両の助成に応募してきており、6年度も「24時間テレビ」福祉車両寄贈の申込をしたところ、厳正な抽選の結果寄贈していただく運びとなり、3月に無事納車された。当日は雪がちらつく中だったが、利用者や職員で式に参加し感謝を伝えた。早速、お花見や受診等に車両を活用している。

全国からの善意で立派な車両を寄贈していただいたことを感謝するとともに、施設利用者だけではなく、地域福祉にも積極的に活用していきたい。

(文責：廣藤)



【24時間テレビ

福祉車両納車式】

〔3〕愛媛県「生産性向上のモデル事業」

「令和6年度愛媛県生産性向上推進事業」補助金交付に申請をして採択された。

5年度の事故発生件数の内の5割強が転倒や転落のヒヤリハット、事故となっているが、再発防止において、職員の見守りが届きにくい場所や時間帯に発生した事故に対しては、推測での再発防止策を取るしかなかった。

ここ数年で介護現場のICT化は加速しているが、自分たちの施設にどのような機器がふさわしいのか、また費用の捻出において検討を続けていた。そのような中、6年度に生産性向上のモデル事業として採択されたことは、驚きでもあった。この補助金により、見守り機器の導入と介護記録システムの機能向上を行った。見守り機器は「センチネア3」を導入した。利用者のシルエットが棒人間で表示されプライバシーに配慮されており、転倒時にはアラートが鳴り、事故前後の動画が保存される仕組みで、事故分析と再発防止に役立つ



【見守り機器の設置】

ている。また、現在使用している介護ソフトに「AIインプットオプション」を追加導入した。画的であったのが、指定の様式に手書きで記入した様式を写真撮影し、それを取り込むことで記録に反映ができ、パソコンやタブレット操作が苦手な職員は助かっている。この機能を活用すると、停電時でも記録を写真に撮り保存しておくことで、復旧後それを読み込ませ記録に反映ができ、事後で入力する手間が大幅に削減できる。その他、記録データをAIが集計をして、平均値の割り出しやいつもと違う内容の記録があればそれを抽出したりして分析と提案がある。過去のデータ集計ができるオプションを基にケア方法の検討ができるようになった。これらを活用することで、記録の見直しの手間が削減され空いた時間で介護に充てる時間が増える。まだまだ使いこなせるまでには至っていないが、今後更に業務の削減と職員の負担軽減にしっかり活用していきたい。



【AIインプットオプションを使用して記録データの取り込み作業】

(文責：廣藤)

○砥部町デイサービスセンター





社会福祉法人 広寿会

〒791-2205

愛媛県伊予郡砥部町総津 405 番地

電話：089-969-2155 FAX：089-969-5151

H P： <https://koujyukai-hirota.com>

M a i l： info@koujyukai-hirota.com

ブ ログ： <https://ameblo.jp/koujukai-hirota/>



特別養護老人ホームひろた 短期入所生活介護事業所ひろた 居宅介護支援事業所ひろた

〒791-2205

愛媛県伊予郡砥部町総津 405 番地

電話：089-969-2155 FAX：089-969-5151



小規模多機能型居宅介護事業所 やまの里たまたに

〒791-2202

愛媛県伊予郡砥部町玉谷 670 番地 1

電話：089-969-5010 FAX：089-969-5011

ブ ログ： <https://ameblo.jp/yamanosatotamatani/>



砥部町デイサービスセンター（砥部町受託事業）

〒791-2205

愛媛県伊予郡砥部町総津 398 番地

電話：089-969-2211 FAX：089-969-5151

